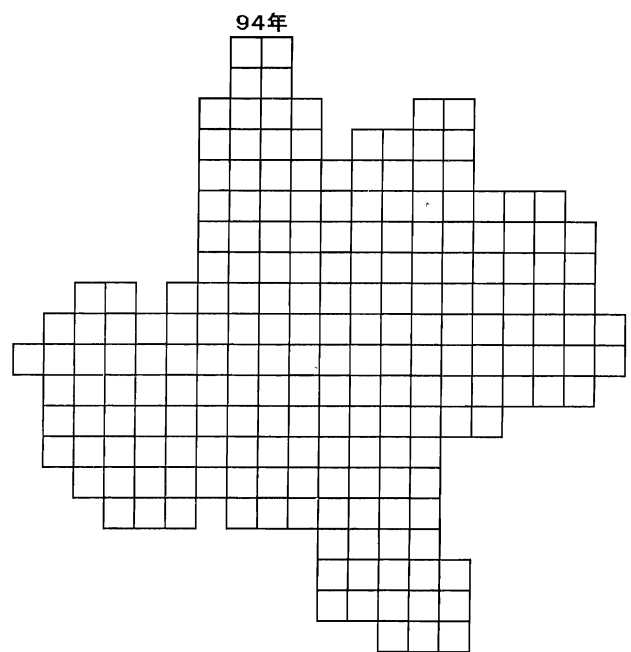
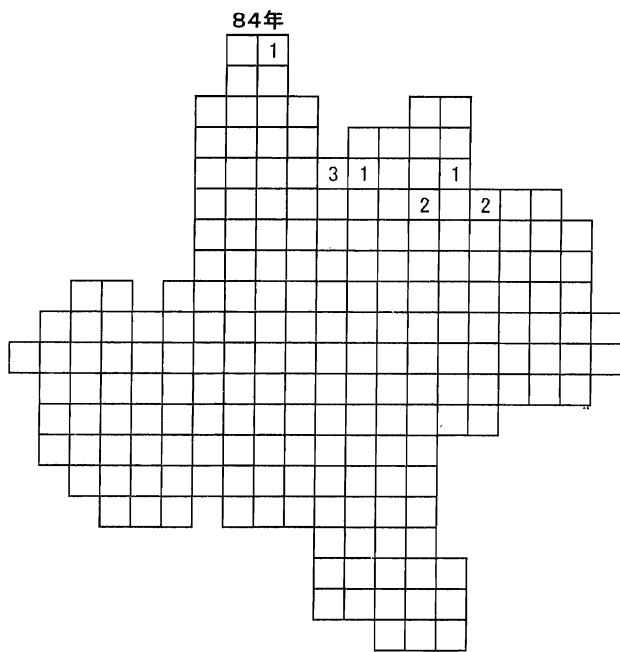
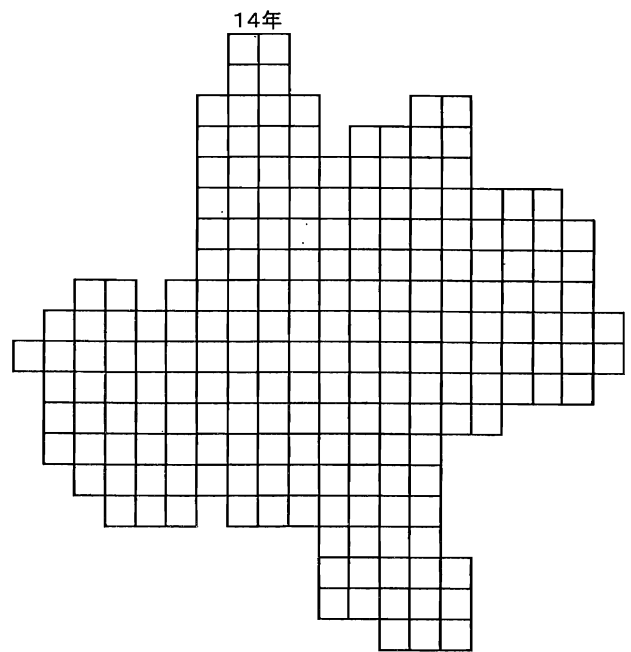
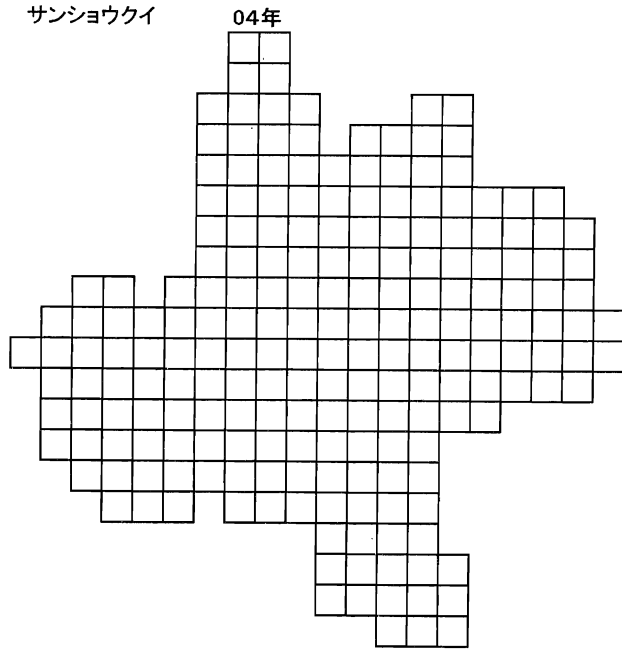




サンショウクイ

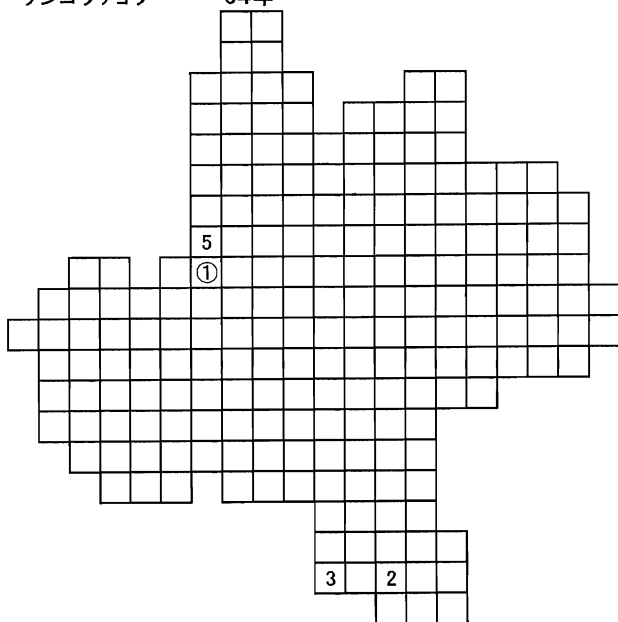


37. サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus*

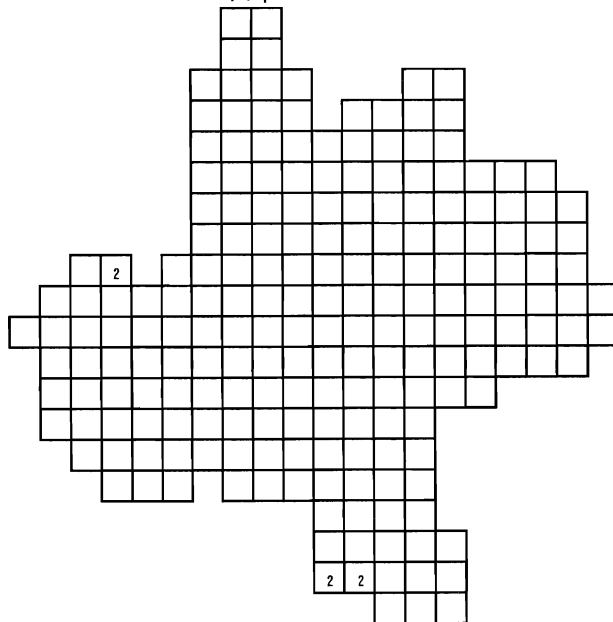
84年に6メッシュ10羽を記録したが、94年、04年、14年とも記録していない。本種は全国的に減少しており、この調査結果もその状況を裏付ける結果になっている。

サンコウチョウ

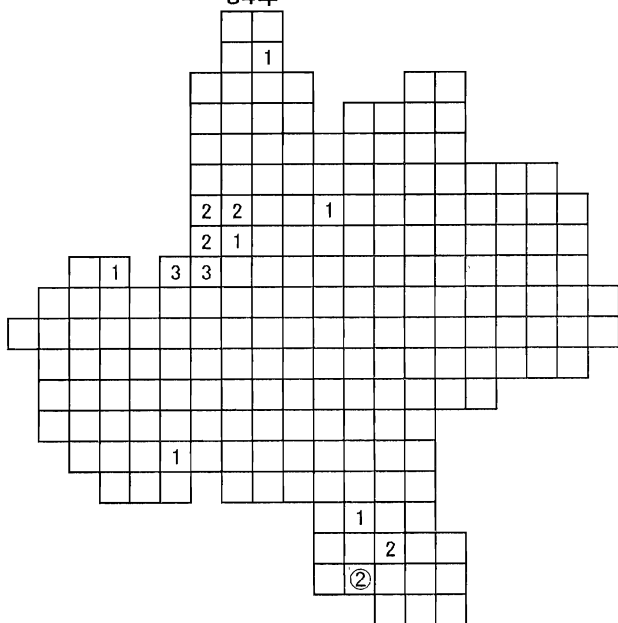
04年



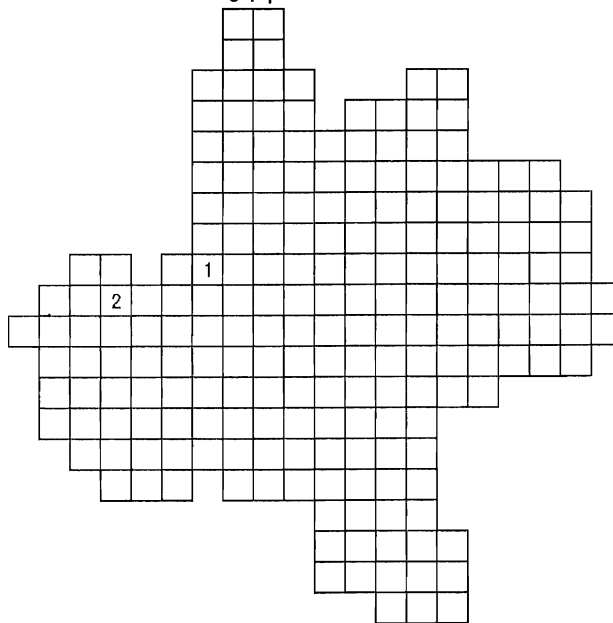
14年



84年



94年



38. サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata*

84年には13メッシュ22羽、94年には2メッシュ3羽、04年には4メッシュ11羽、今回14年にも3メッシュ6羽を記録した。

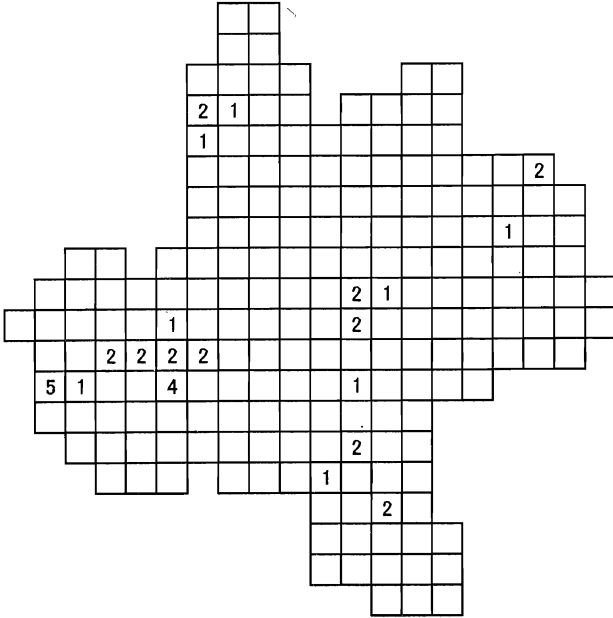
市内では少数が棲息しているのみである。かつて本種が棲息していた平地林や屋敷林では全く見ることが出来なくなり、丘陵地の一部でしか記録されていない。その少数個体にカメラマンやバードウォッチャーが押しかけて、結果として繁殖を妨害している。一つの巣をバスで多人数が見に来るなどの例も出ている。人が集まるとカラスがのぞきに来て、卵や雛を捕られる例もある。

鳥類保護がある程度普及した後に問題になるのはカメラマンとバードウォッチャーであるとは早くから言われてきたが、現実の問題になってきている。この問題を解決していかないと本種など見たいと思う人が多い種の増加は望めないと思われる。

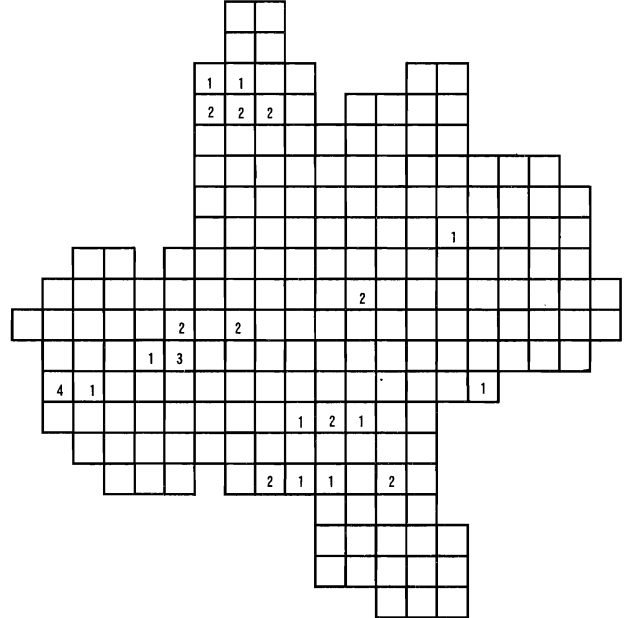


モズ

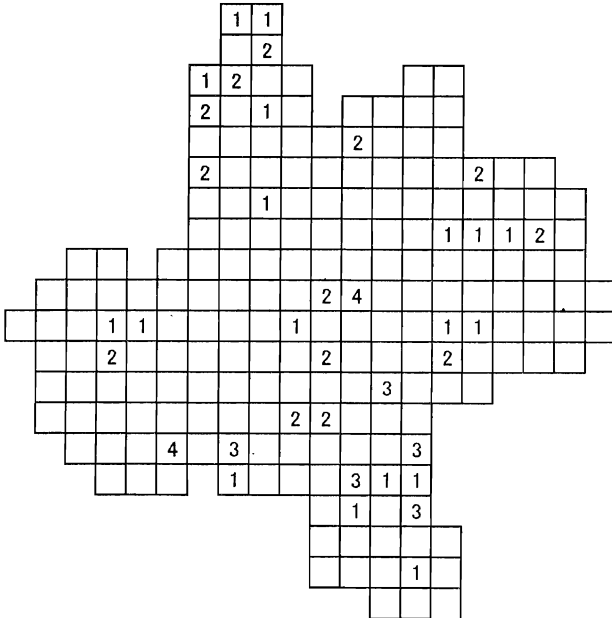
04年



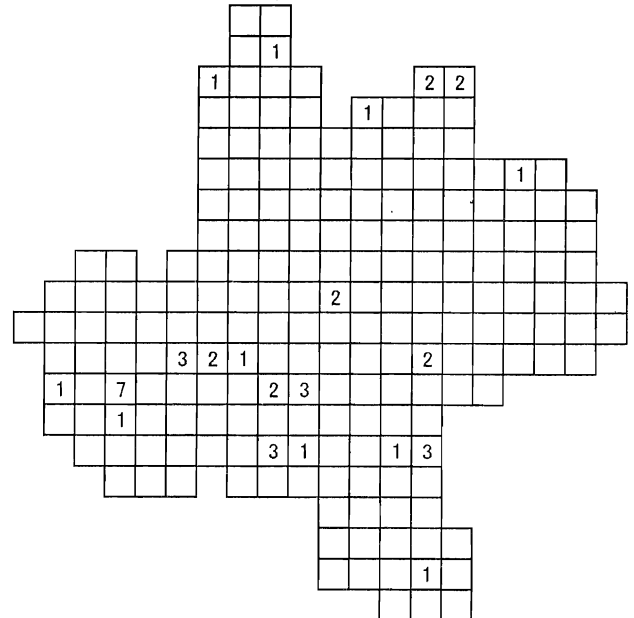
14年



84年



94年



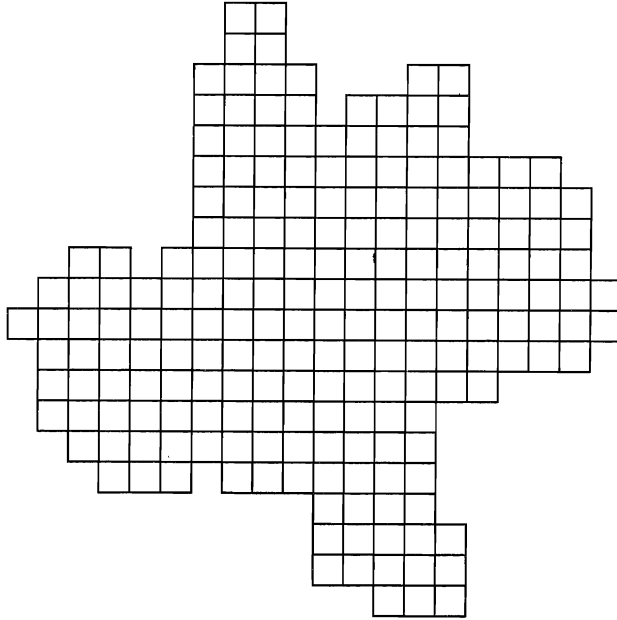
#### 40. モズ *Lanius bucephalus*

84年には38メッシュ67羽、94年には21メッシュ41羽、04年には20メッシュ37羽、今回14年にも21メッシュ35羽を記録した。84年に比較して04年は55.2%、14年には52.2%にまで減少している。市域では明瞭な減少傾向にある。

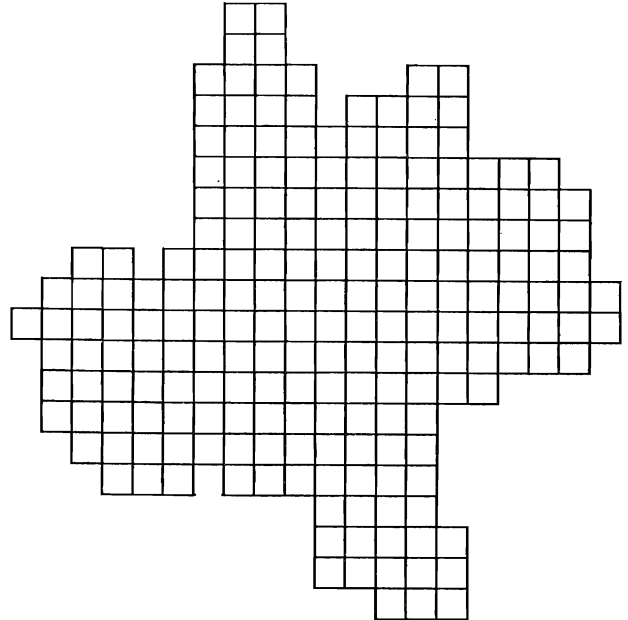
棲息環境が河川敷や農耕地であることが多く、市街地化のための農地の減少、さらにその農地への農薬の使用などが原因と思われる。動物食のモズの餌は昆虫類はじめ小動物であり、農薬の影響は少なくないと思われる。本種などモズ類はカッコウの托卵相手の一つであり、本種の減少はカッコウの減少にもつながっていると思われる。

アカモズ

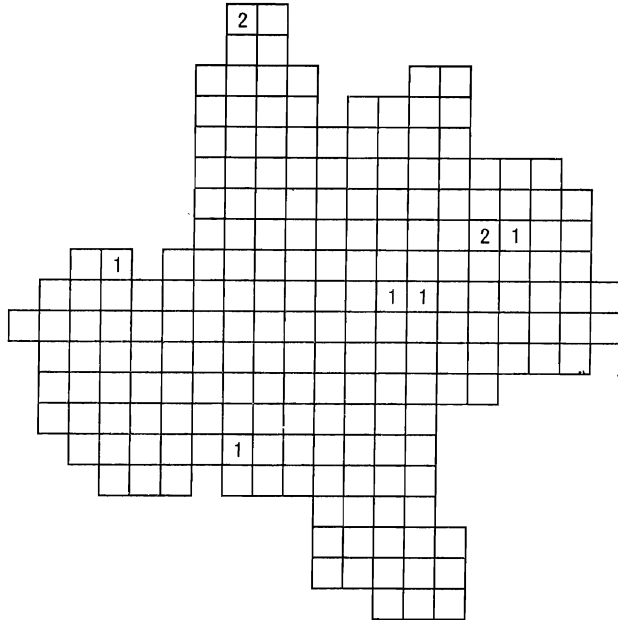
04年



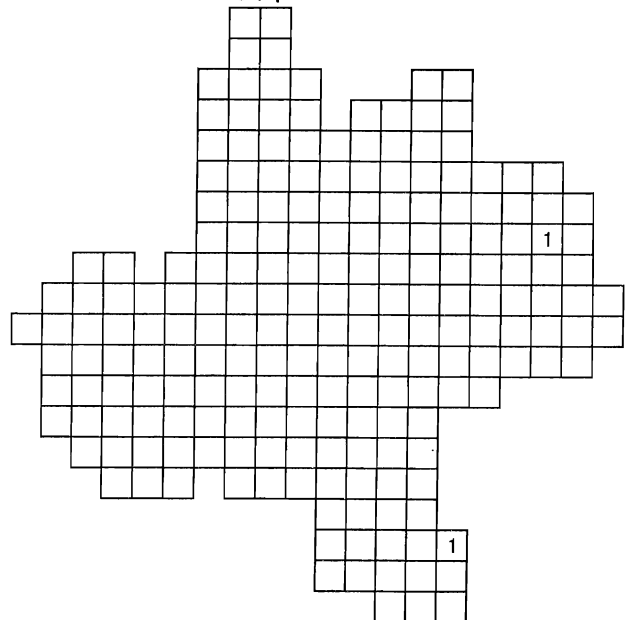
14年



84年



94年

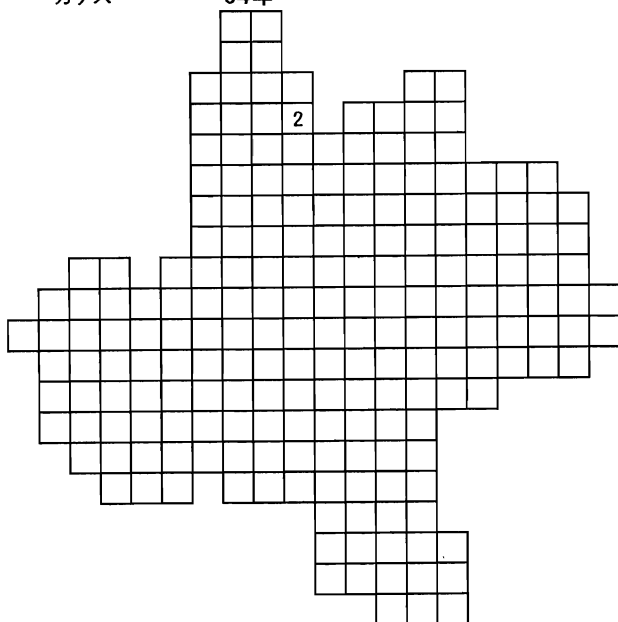


#### 41. アカモズ *Lanius cristatus*

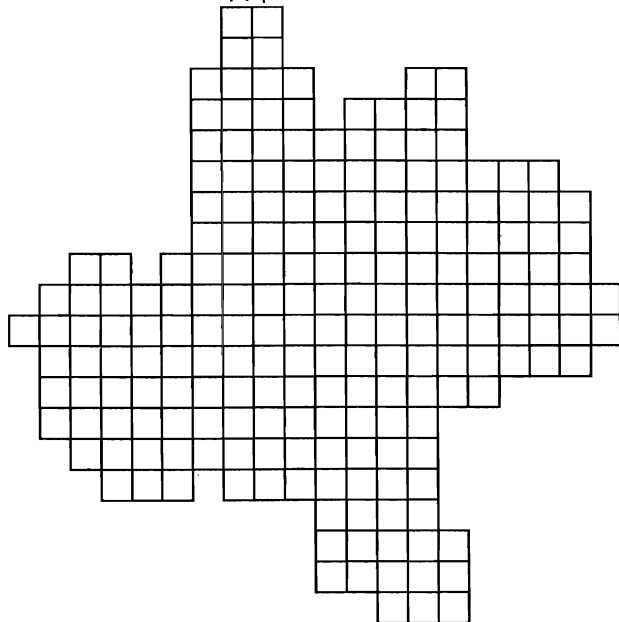
84年に7メッシュ9羽を、94年には2メッシュ2羽を記録したが、04年、14年も記録していない。この調査結果のみならず、近年では全くといってよいほど記録されなくなっている。本種は全国的に減少しており、この調査結果もその状況を裏付ける結果になっている。地域での減少原因はモズと同様と思われる。

カケス

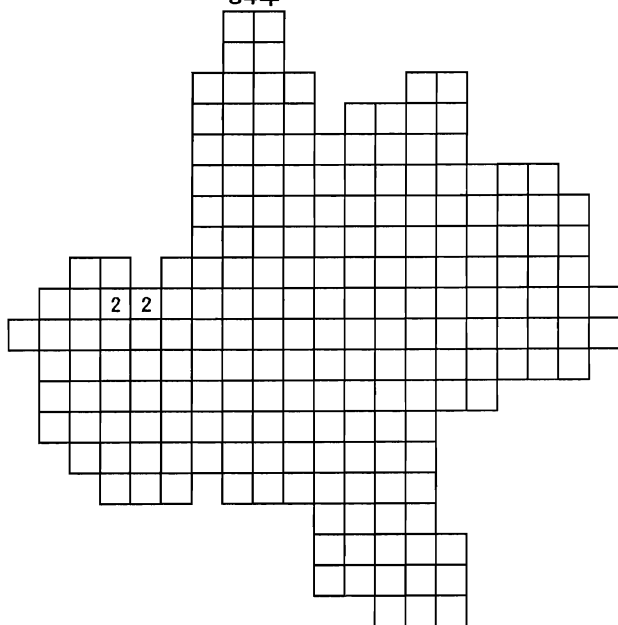
04年



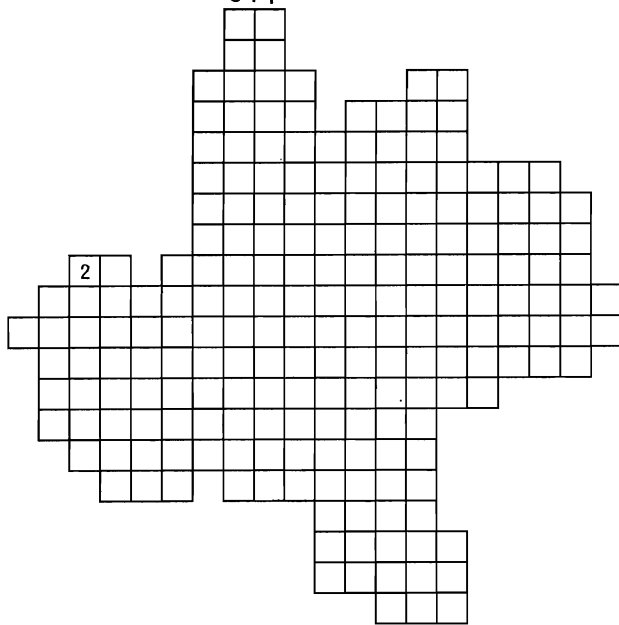
14年



84年



94年



#### 42. カケス *Garrulus glandarius*

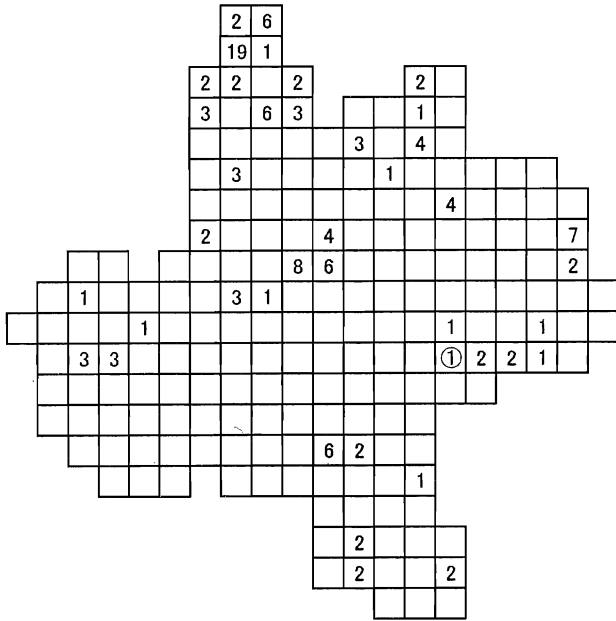
84年には2メッシュ4羽、94年には1メッシュ2羽、04年には1メッシュ2羽を記録し、今回14年には記録しなかった。本種は山地の林で繁殖する種のため、市域での繁殖期の棲息情報は少ないが、少数ではあるが棲息していたことに注目していたが、それも失われたのではないかと思われる。



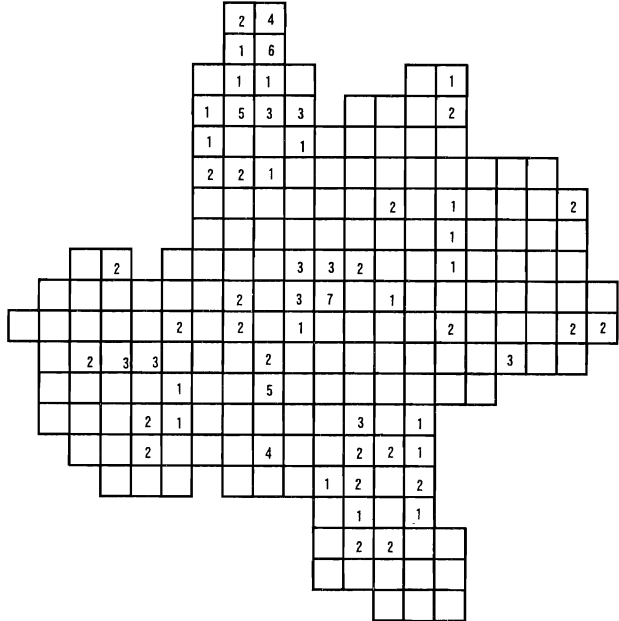


ハシボソガラス

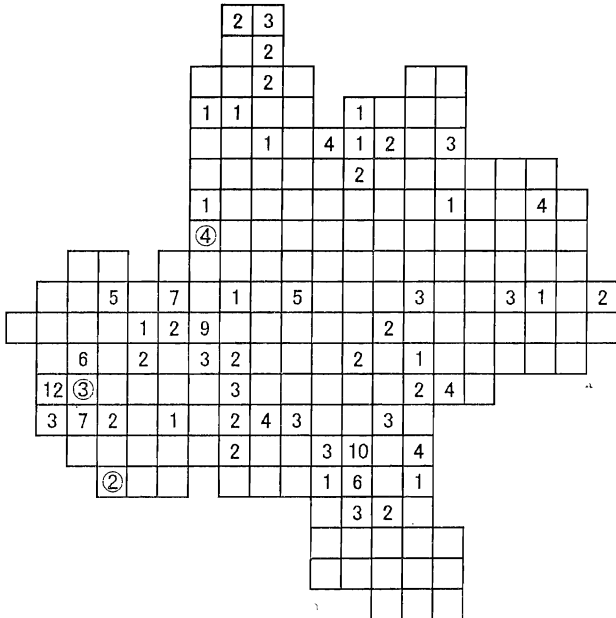
04年



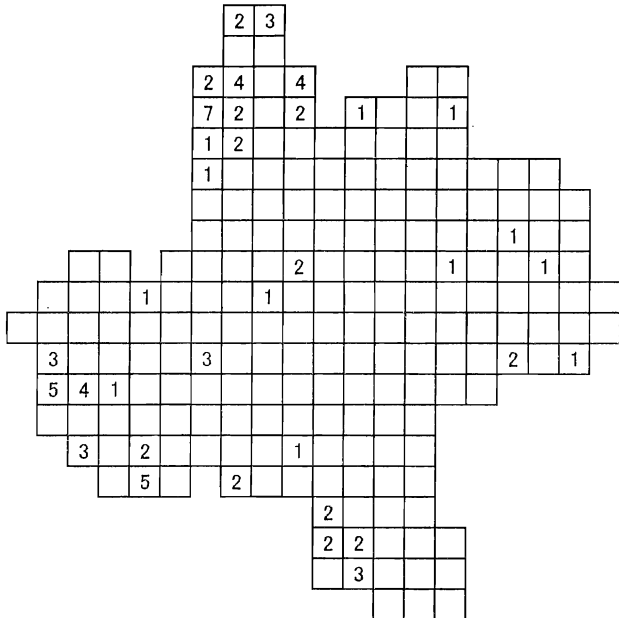
14年



84年



94年



44. ハシボソガラス *Corvus corone*

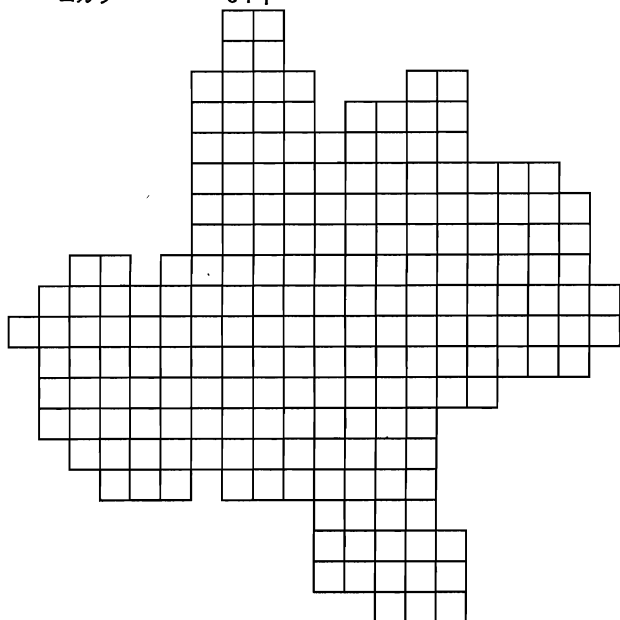
84年には58メッシュ175羽、94年には35メッシュ80羽、04年には41メッシュ128羽、今回14年にも60メッシュ131羽を記録した。84年に比較し94年では45%台に減少したが、04年14年では73~74%台にまで回復している。

市域では農耕地の優先する地域では減少傾向にあるが、住宅地域では見ることができるようになってきていることが、回復の理由と思われる。しかし、本種の個体数の増減には、近似種ハシブトガラスとの競合が考えられるので、ハシブトガラスの動向に注目する必要がある。

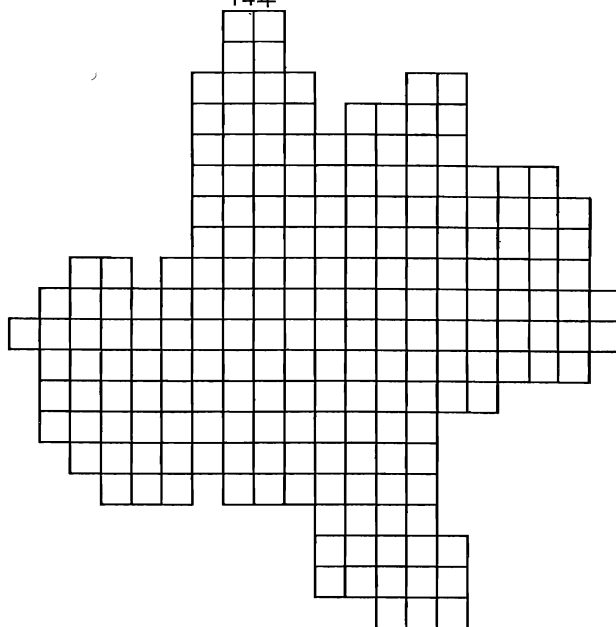


コガラ

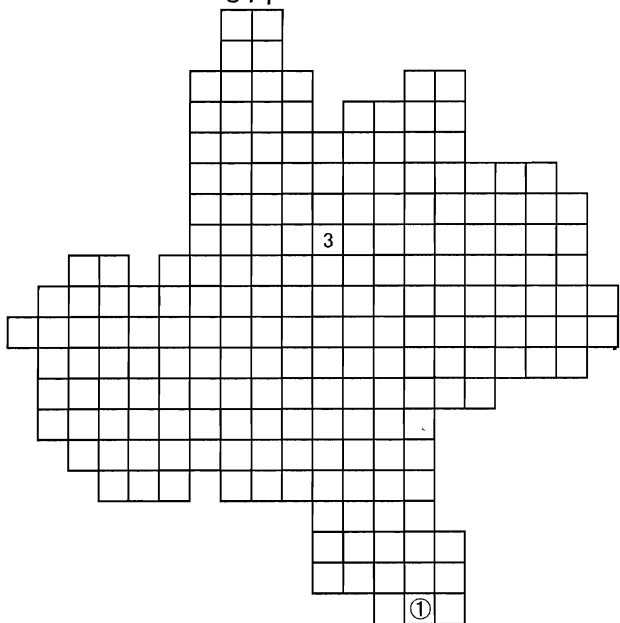
04年



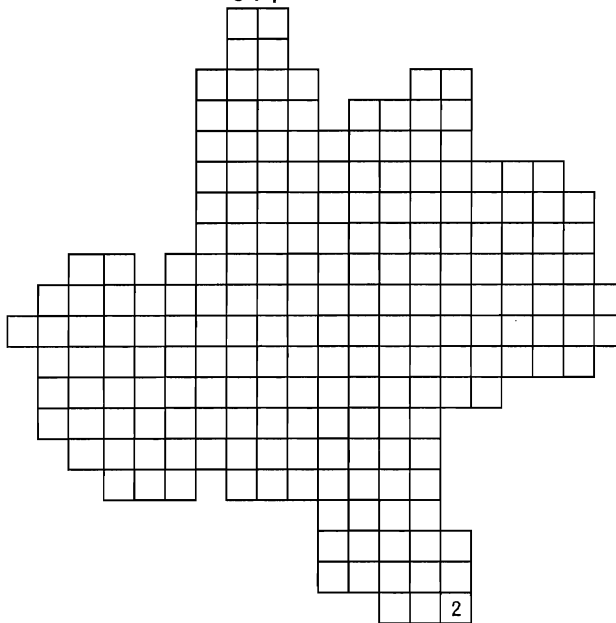
14年



84年



94年

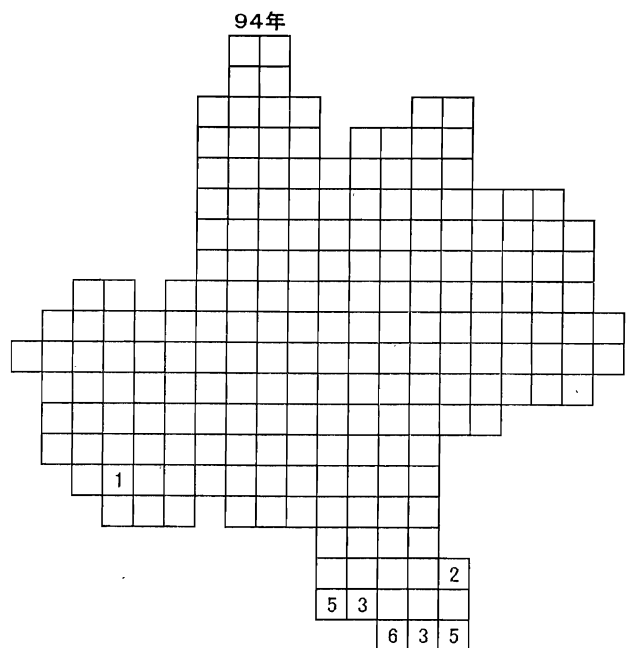
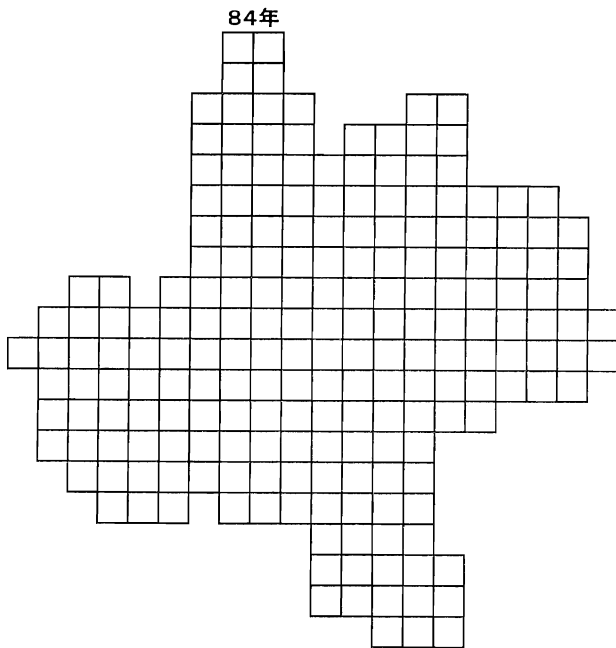
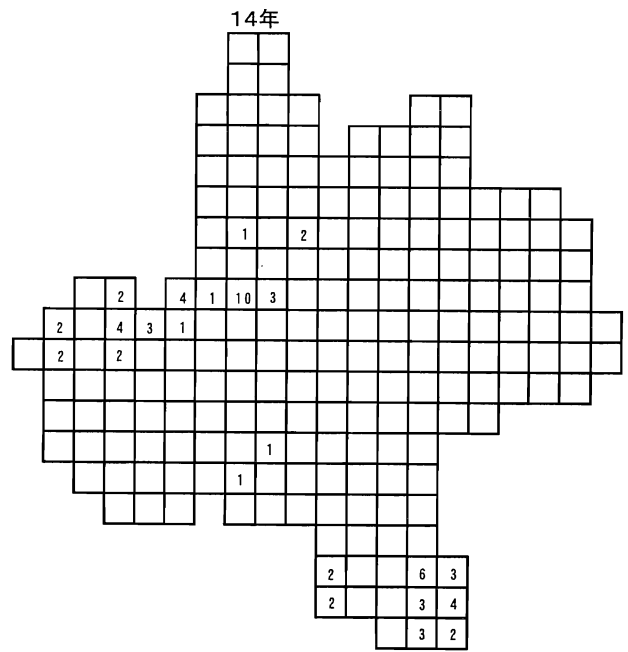
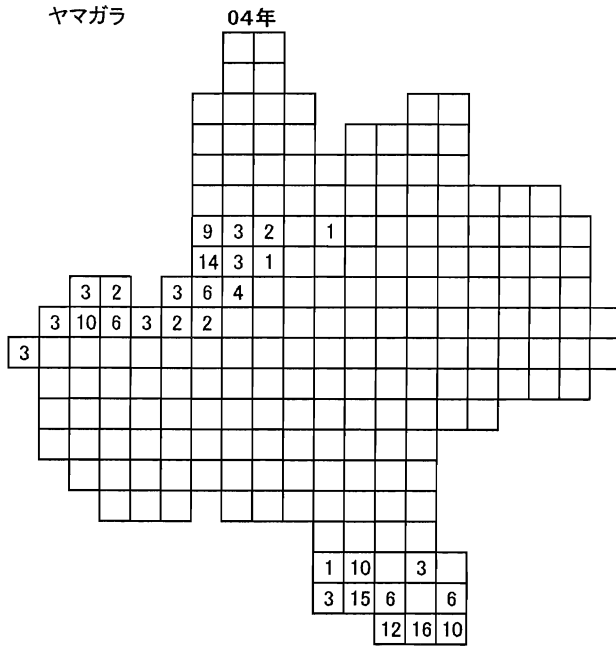


#### 46. コガラ *Poecile montanus*

84年に2メッシュ4羽を、94年には1メッシュ2羽を記録したが、04年、14年とも記録していない。

関東地方では高標高の落葉広葉樹林などで繁殖する種で、市域の55～205mといった低標高での繁殖期の棲息は、それだけで注目していたが、記録は続かなかった。全国的な温暖化の影響を受けるとすれば、今後の記録は考えられないことになる。

ヤマガラ



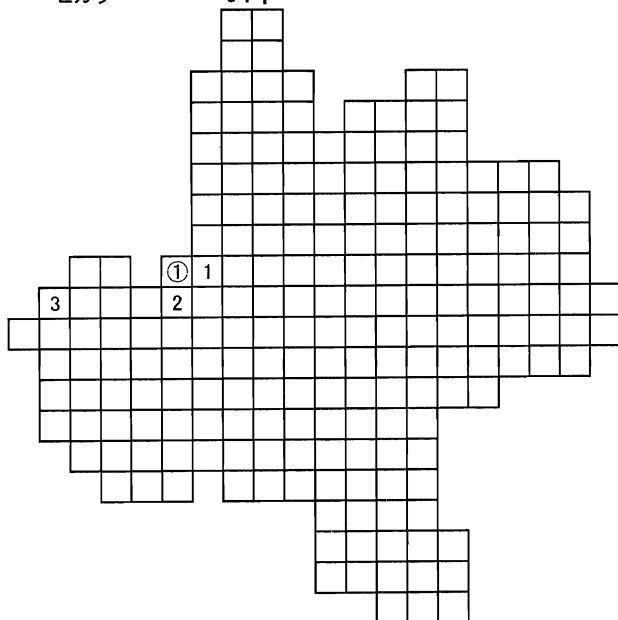
#### 47. ヤマガラ *Poecile varius*

84年には記録せず、94年には7メッシュ25羽、04年には29メッシュ126羽、今回14年にも23メッシュ64羽を記録した。04年では94年の648%にも増加したが、14年では04年の2分の1にまで減少している。いずれも加治丘陵、狭山丘陵に棲息している。

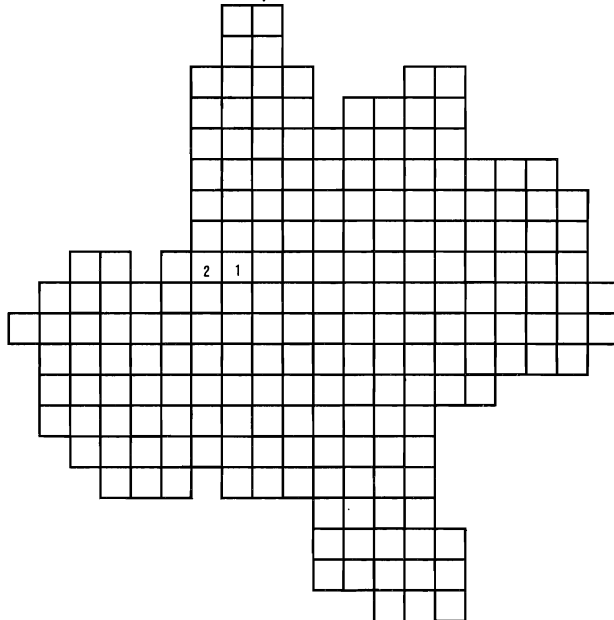
かつての薪炭用の雑木林が伐採されず放置され、広葉樹林に育ってきたことで本種の棲息環境が出来てきたことによる増加と思われる。14年の減少は爆発的な増加期の後の安定期になってきたことによるのではないかと考えられる。しかし、本種の最も好む棲息環境である常緑広葉樹林は市域に少なく、落葉広葉樹林であるため、同樹林を最も好む棲息環境にしているシジュウカラとの競合も考えられる。

ヒガラ

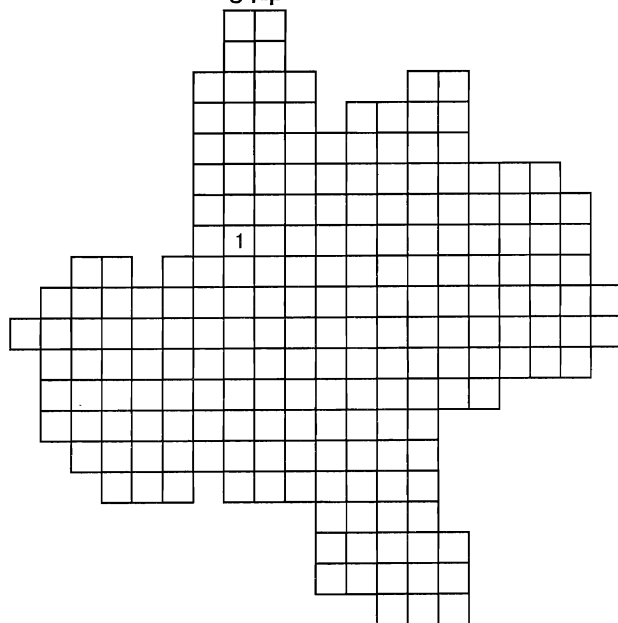
04年



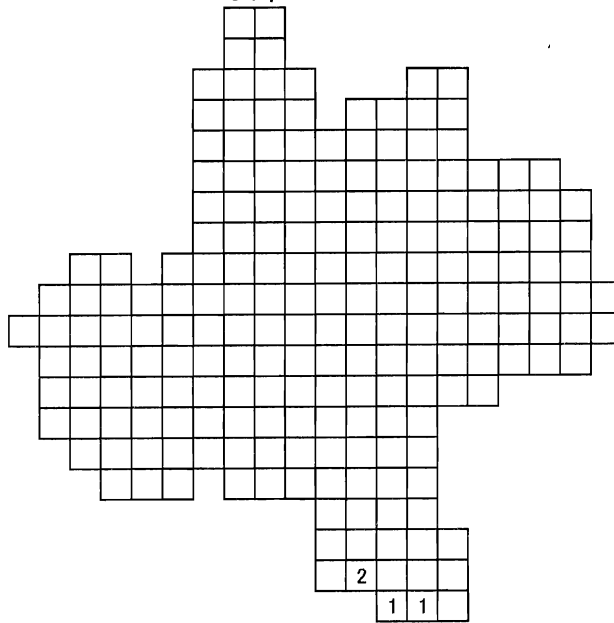
14年



84年



94年

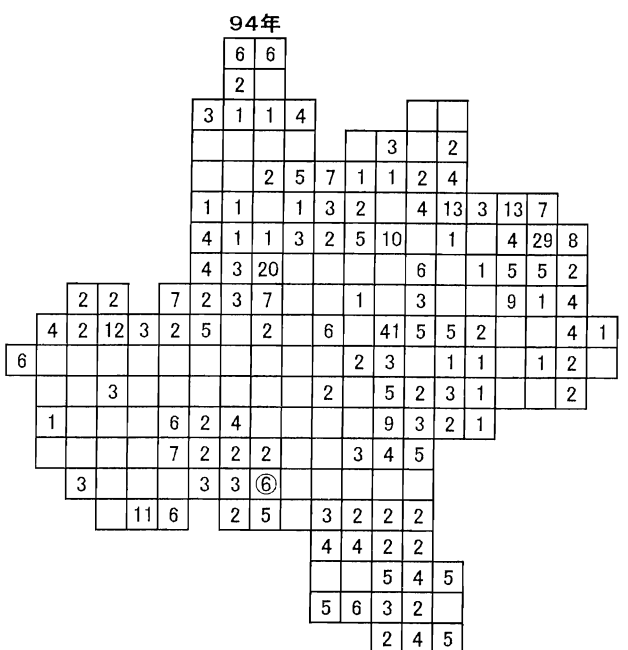
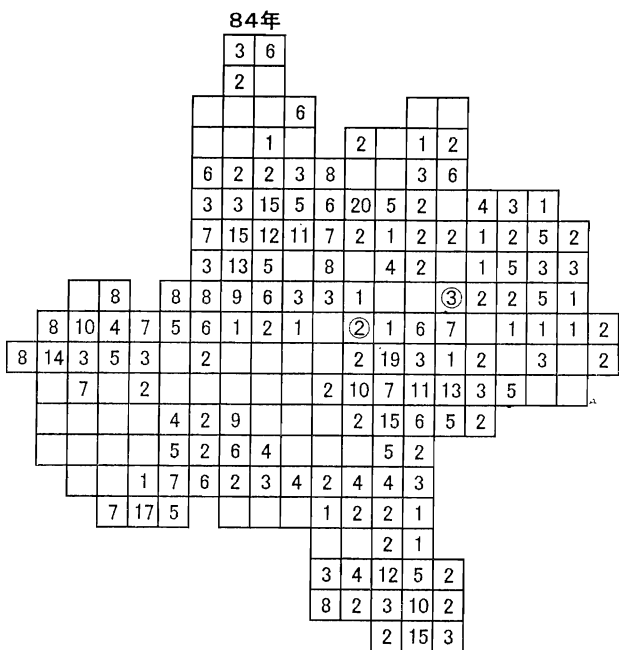
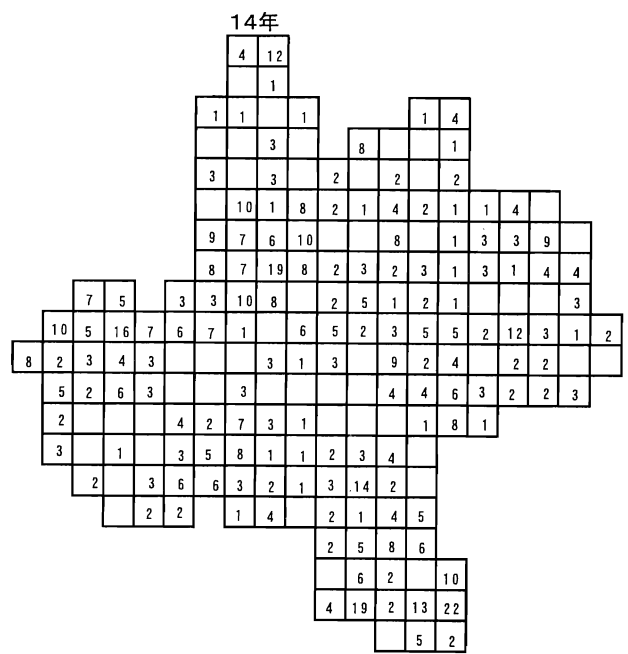
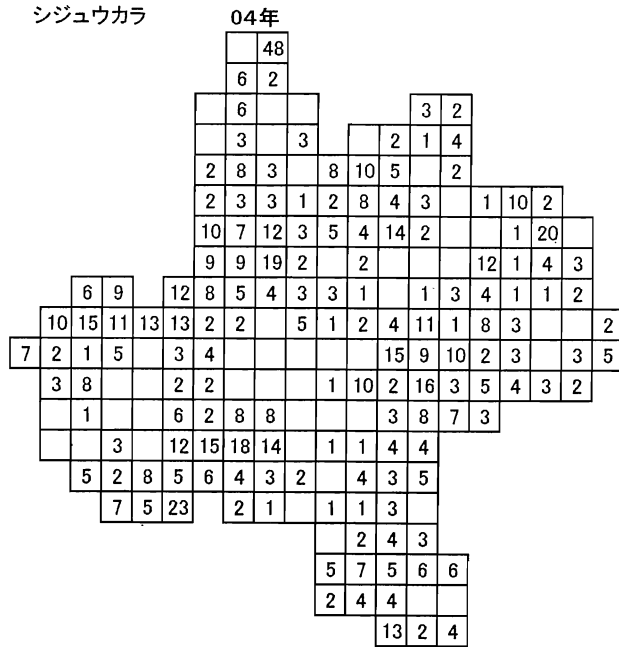


#### 48. ヒガラ *Periparus ater*

84年には1メッシュ1羽、94年には3メッシュ4羽、04年には4メッシュ7羽、今回 14年にも2メッシュ3羽を記録した。

関東地方では高標高の落葉広葉樹林・針葉樹林などで繁殖する種で、市域の55～205mといった低標高での繁殖期の棲息は、それだけで注目している。かつての雑木林が広葉樹林に育ったことで、本種の棲息環境が出来てきたことによると思われる。ごく少数とはいえ、繁殖期の棲息記録なので今後も注目していくことが大切である。

シジュウカラ



49. シジュウカラ *Parus minor*

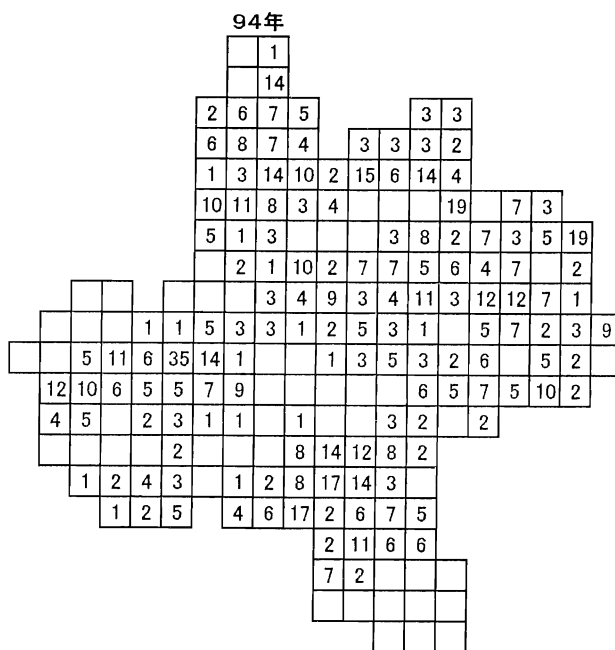
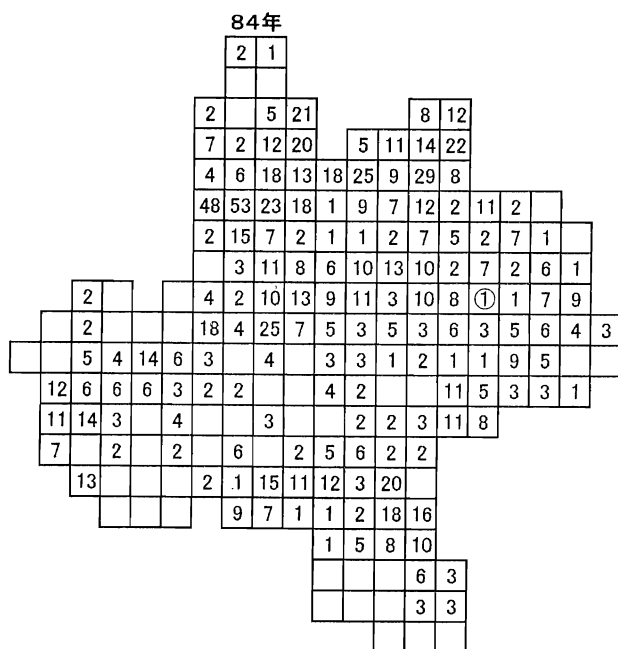
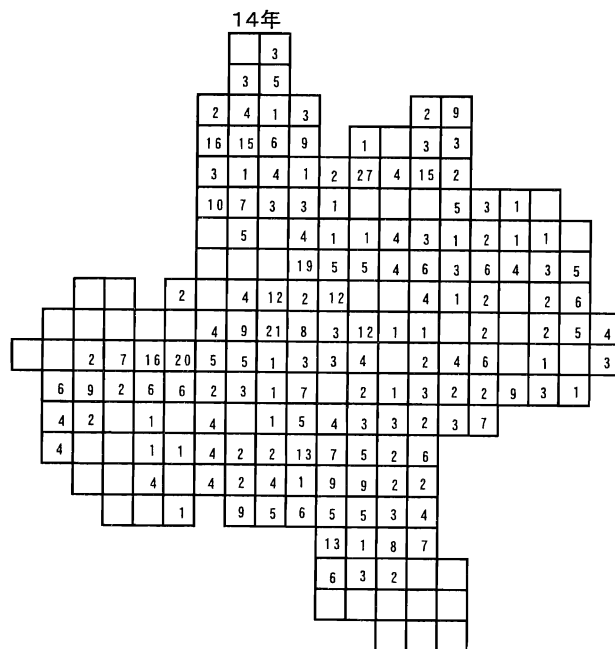
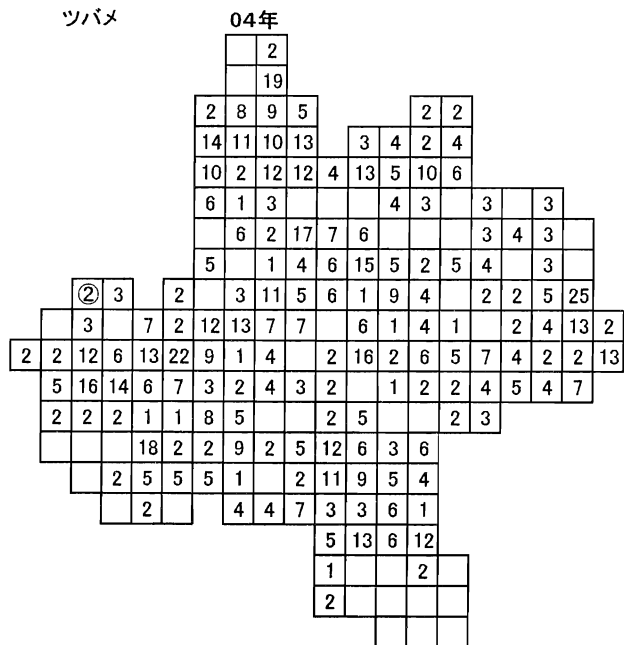
84年には147メッシュ701羽、94年には125メッシュ530羽、04年には157メッシュ867羽、今回14年には154メッシュ670羽を記録した。94年は出現メッシュ(区画)数・個体数とも減少しているが、04年には84年以上に増加している。14年には84年の個体数に復しつつある。

個体数が多いので、数字の変化は大きいと見えるが、これほどの数字は野生の鳥の個体数としては、安定した状況にあると思われる。丘陵の林(かつての雑木林)が広葉樹林に育ったことで、本種の棲息環境がしっかりと出来たことによると思われる。

カラ類はいずれも樹洞に巣を造るグループで、樹林が育つことで自然の樹洞ができやすくなるほか、コゲラなどのキツキ類の巣穴がカラ類の巣になることも多い。枯死木などもカラ類・キツキ類に採餌場所や営巣場所を提供することになり得るので、整理して林外へ出してしまうことをせず存在させることも生態系の維持には必要な施策と考えられる。さらに、4種のカラ類の競合関係がどのようになるか、も注意していく必要がある。



ツバメ



51. ツバメ *Hirundo rustica*

84年には158メッシュ1,169羽、94年には149メッシュ842羽、04年には161メッシュ902羽、今回14年にも154メッシュ727羽を記録した。出現するメッシュ(区画)数は大きく変わっていないと思われるが、個体数の減少は止まらない状況にある。14年は84年の62%にまで減少している。

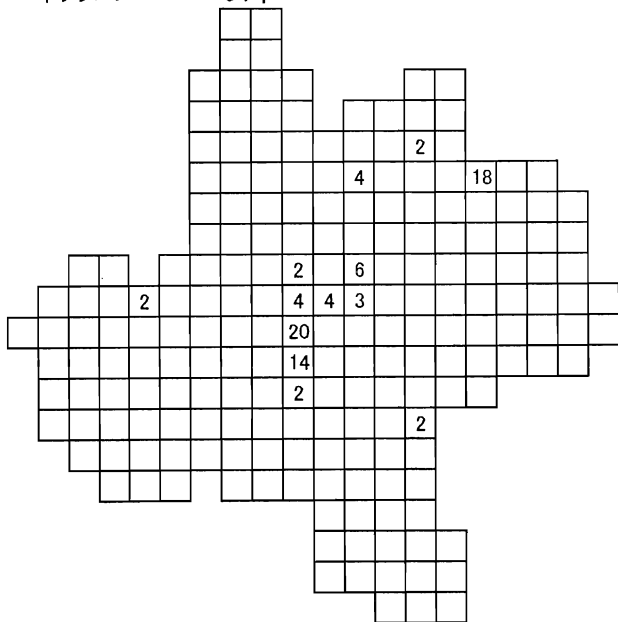
ツバメは繁殖場所に人の生活場所である建物を利用し、人通りの多い場所を選ぶ性質があることが知られている。住宅など建築物は年々増えているが、ツバメが利用しやすい軒の深い建物は減少している。市街地では巣に使用する泥が手に入らないことさえある。また、農地で使用される農薬は餌である空中を飛ぶ昆虫類を減少させている。さらに、河川敷のヨシ原は、ツバメの集団場として使われるが、入間川の河川敷にヨシ原が無くなっている。

河川敷のような自然の度合いが高い場所を人の都合のみで使用する(例えばグラウンド、駐車場など)ことが、鳥類はじめ生き物たちの生活場所を奪っていることも、考えていく必要がある。

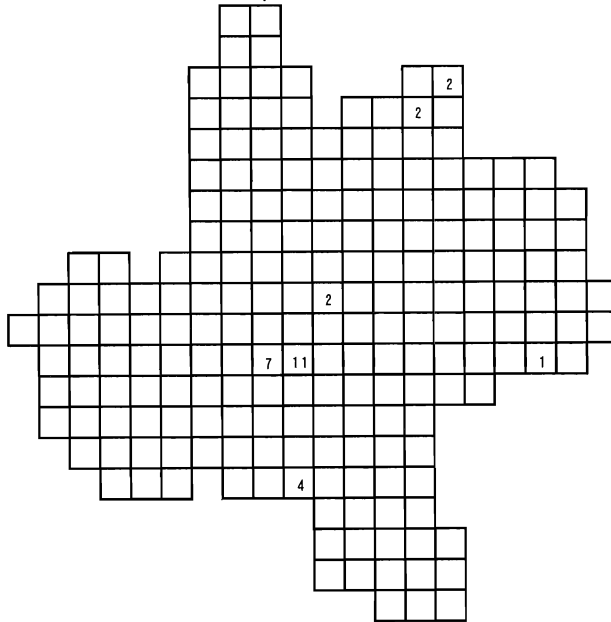


イワツバメ

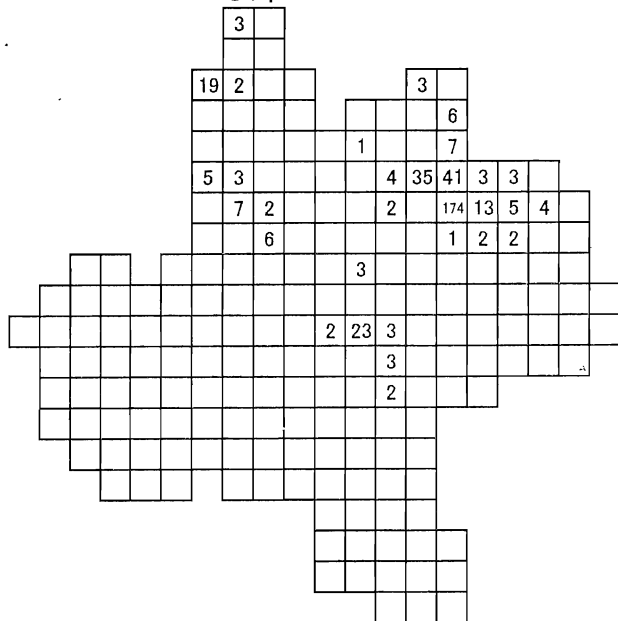
04年



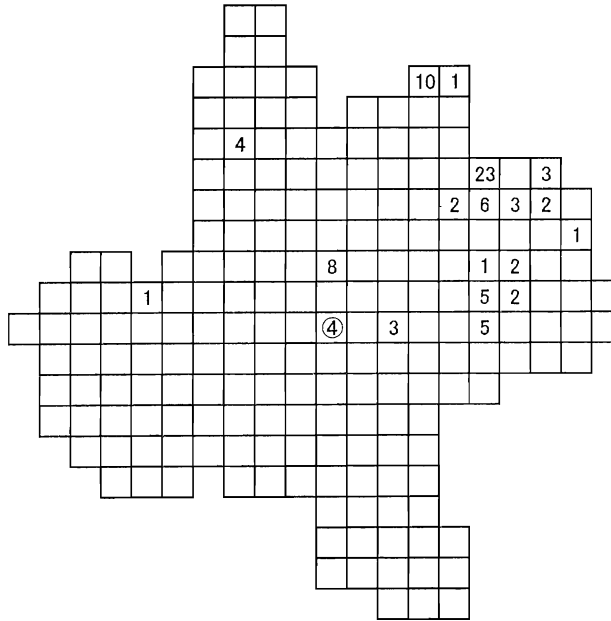
14年



84年



94年

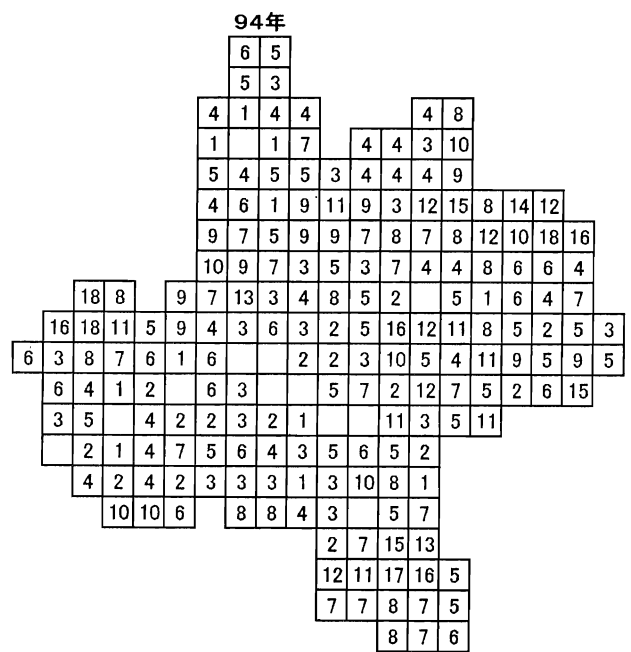
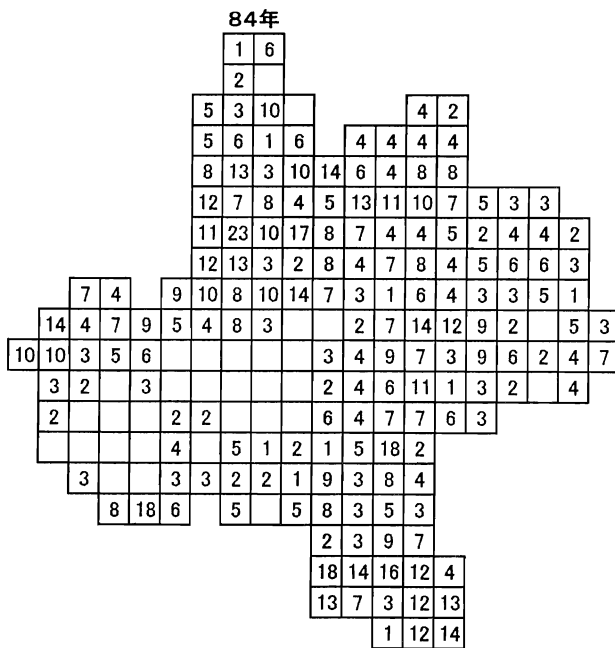
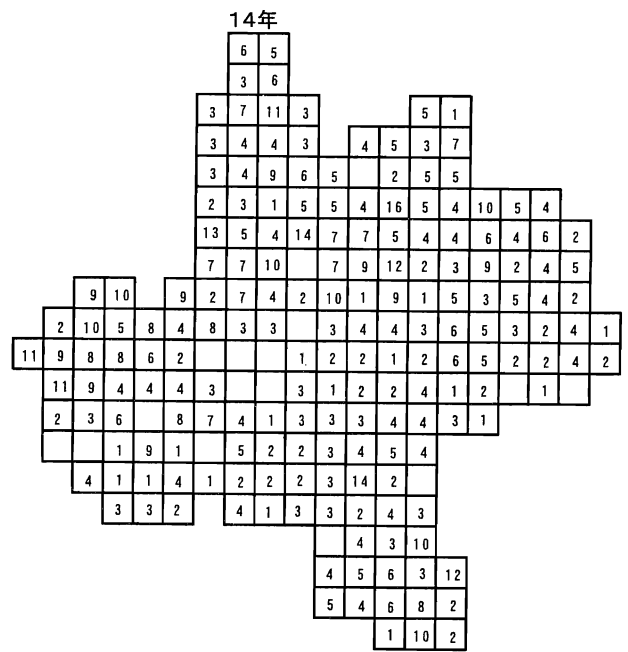
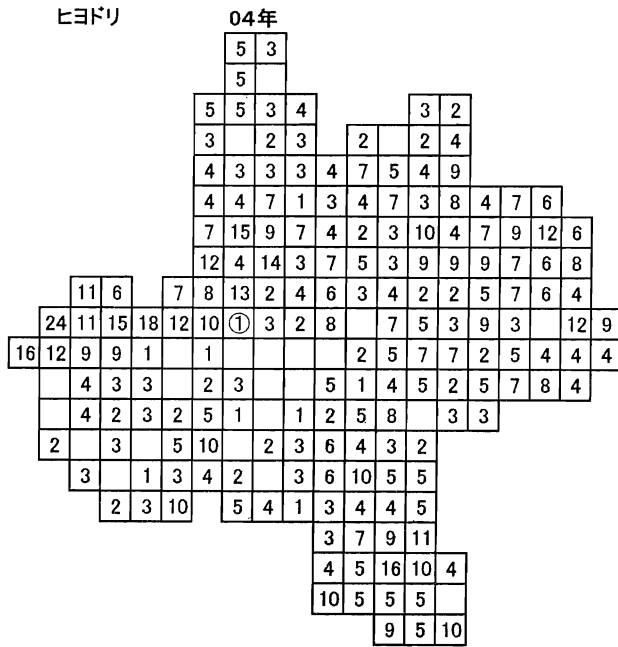


## 52. イワツバメ *Delichon dasypus*

84年には31メッシュ389羽、94年には19メッシュ86羽、04年には13メッシュ83羽、今回14年にも7メッシュ29羽を記録した。

84年の調査時には集団繁殖地であった市役所庁舎を含むメッシュと周辺で記録している。1990年の秋冬に庁舎の外壁工事で巣を取り払ってしまったので、94年・04年には庁舎の近隣で営巣するものが記録されたが、84年に比較し5分の1程度でしかない。14年には庁舎を含むメッシュやその周辺ではないところで記録しているため、繁殖地は他へ移動したといえる。

ヒヨドリ

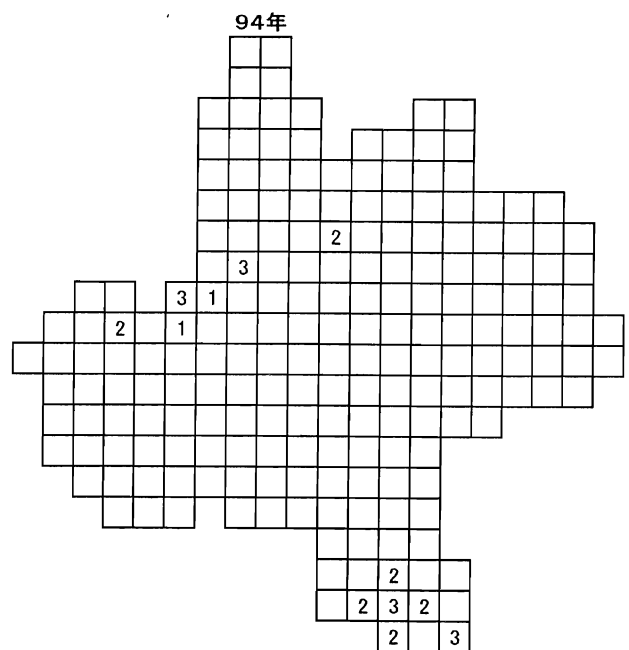
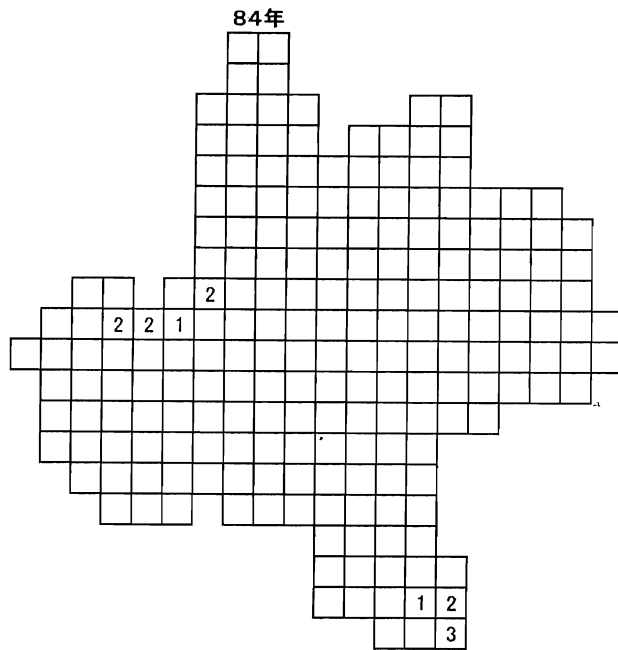
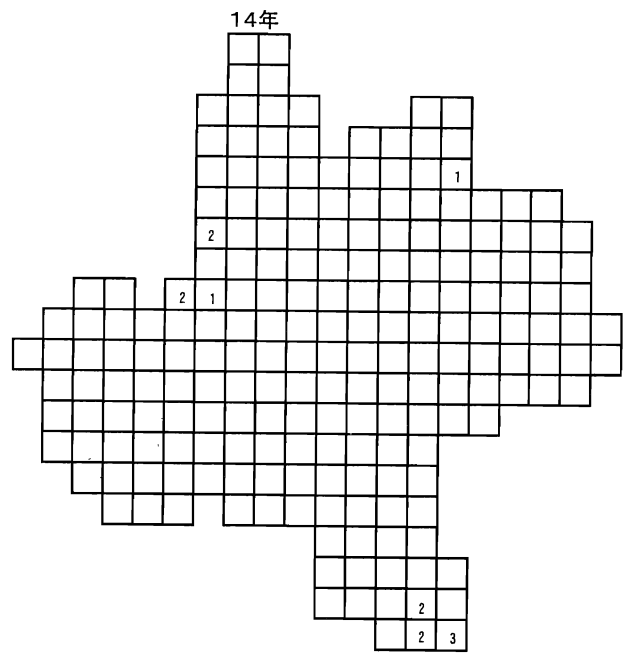
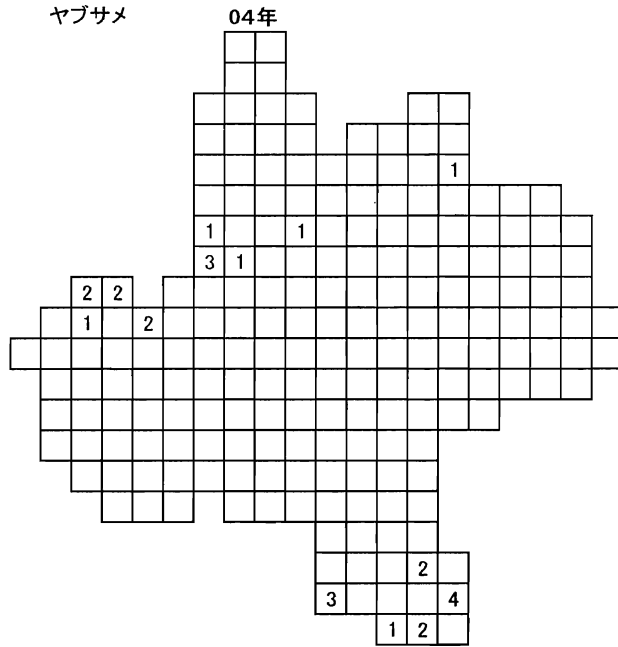


53. ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*

84年には174メッシュ1,079羽、94年には193メッシュ1,212羽、04年には182メッシュ1,008羽、今回14年にも190メッシュ866羽を記録した。84年に比較し94年では112.3%に増加しているものの、04年では93.4%に、14年では80%にまで減少している。市域では樹木の生えている・あるいは木を植えている場所なら、ほぼ棲息している。多少の増減はあるものの市域全体に分布している。



ヤブサメ

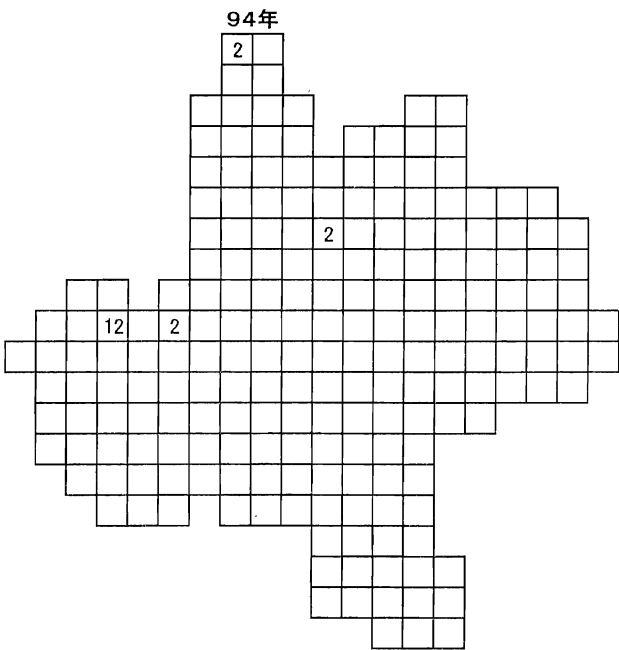
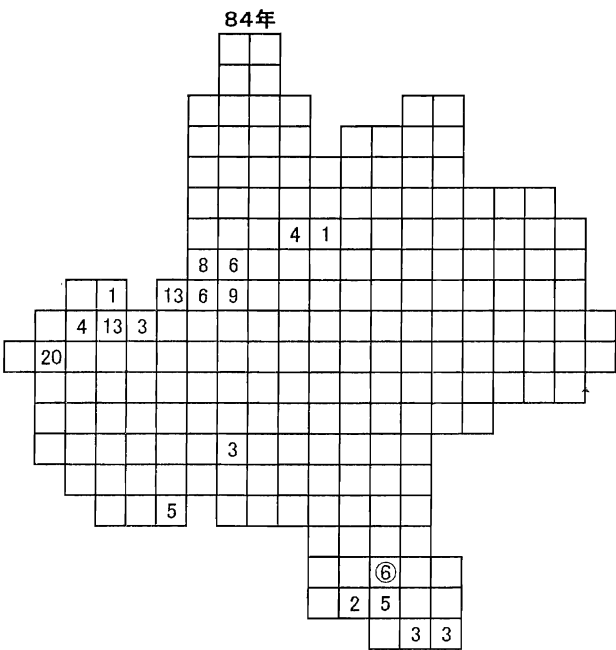
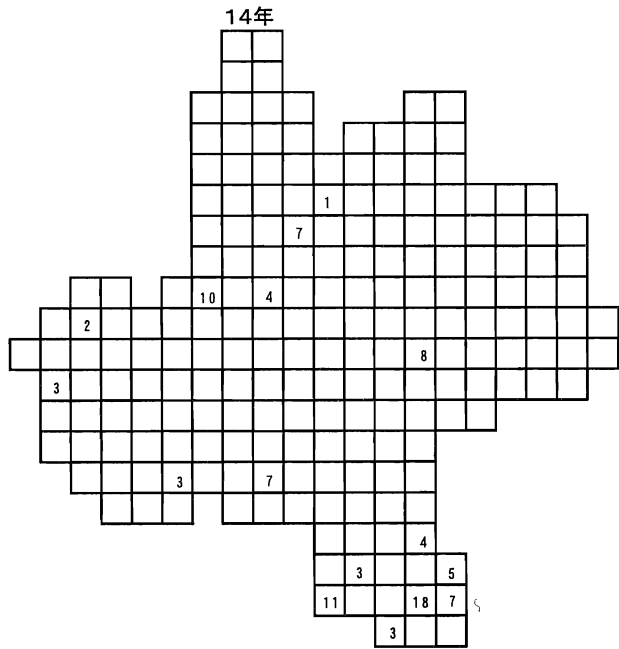
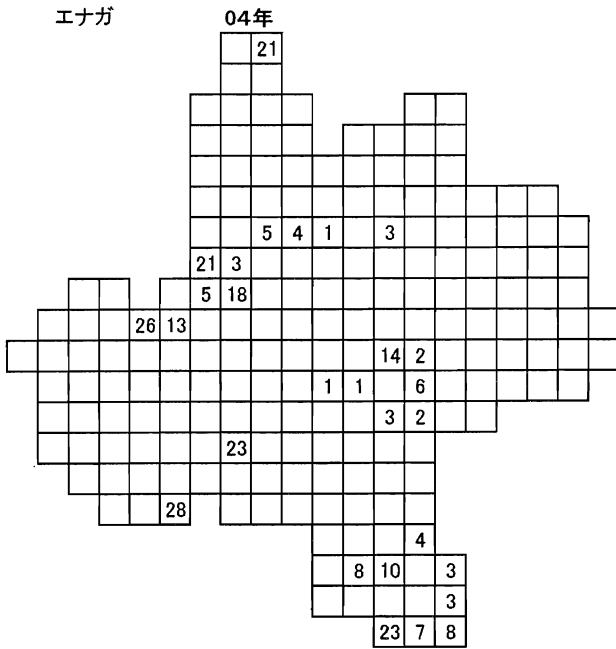


### 55. ヤブサメ *Urosphena squameiceps*

84年には7メッシュ13羽、94年には12メッシュ26羽、04年には14メッシュ26羽、今回14年にも7メッシュ13羽を記録した。84年に比較し94年・04年は2倍に増えているが、04年には84年と同等になっている。

加治丘陵・狭山丘陵の雑木林の下層植生が存在することが本種の棲息には大切である。

エナガ

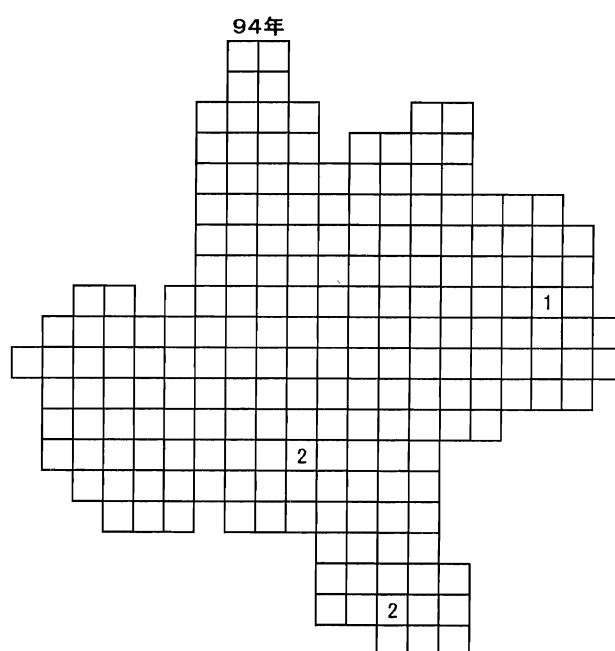
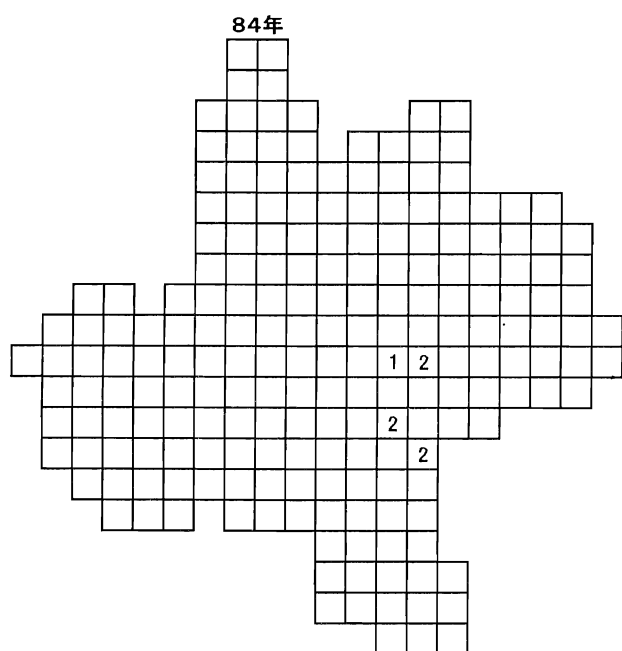
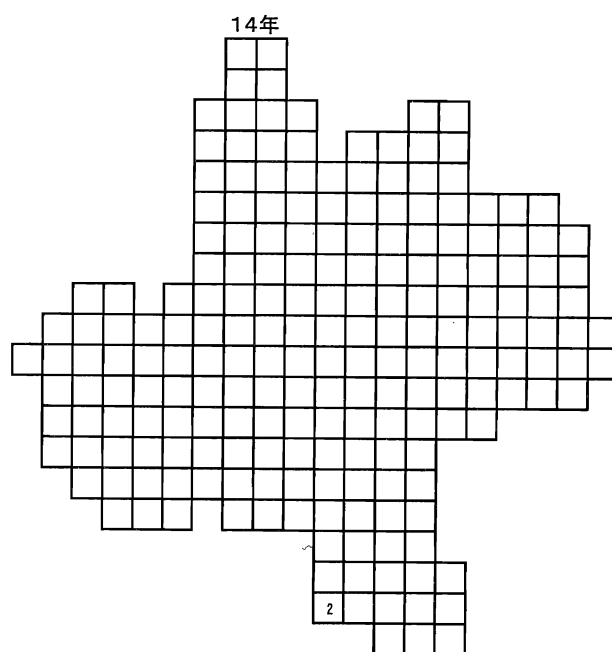
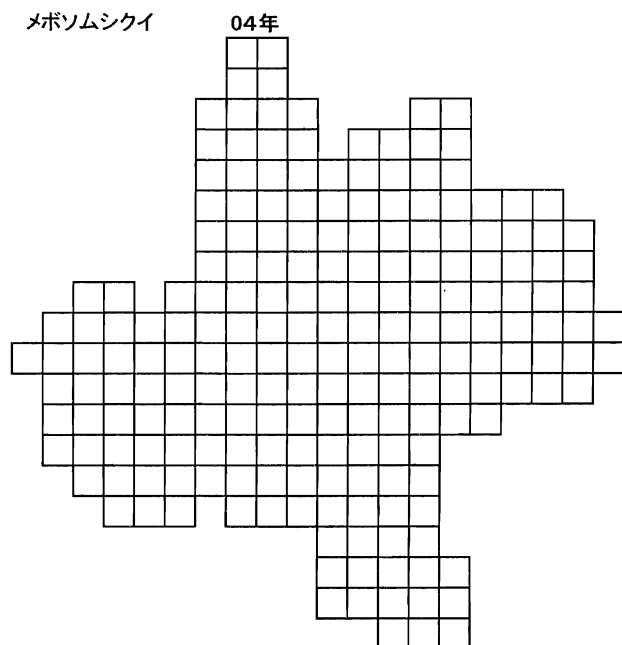


### 56. エナガ *Aegithalos caudatus*

84年には19メッシュ115羽、94年には4メッシュ18羽、04年には28メッシュ266羽、今回14年にも16メッシュ96羽を記録した。84年に比較し94年では15.6%にまで減少し、04年では231%に増加し、04年では83.4%にまで減少している。14年は04に比較して36%にまで減少している。このような急激な増加減少が何によるものか、注目していくことが大切である。

下層植生・中層植生が存在する森林が棲息環境であり、丘陵地の林が今後大きくなることで安定的な出現が考えられる。ただ10年毎の個体数変化が、数年単位の個体数変化と同じ傾向になるかは不明で、細かい変化を知るには頻度を高めた調査が必要である。

メボソムシクイ



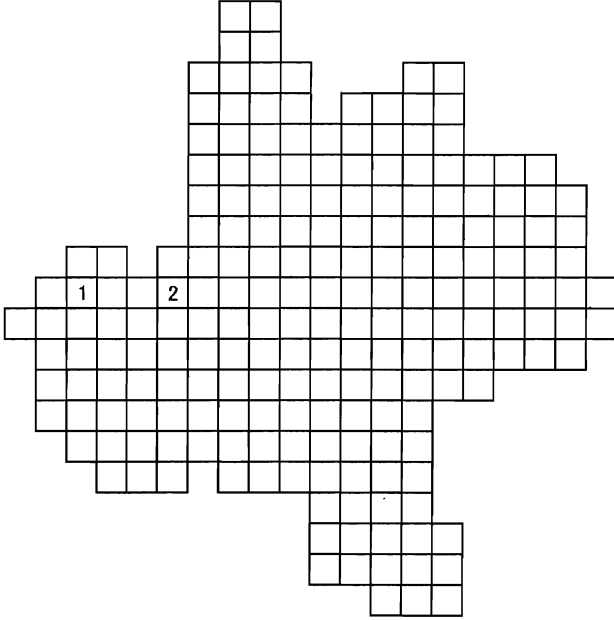
**57. メボソムシクイ *Phylloscopus xanthodryas***

84年には4メッシュ7羽、94年には3メッシュ5羽を記録し、04年には記録せず、今回14年にも1メッシュ2羽を記録した。

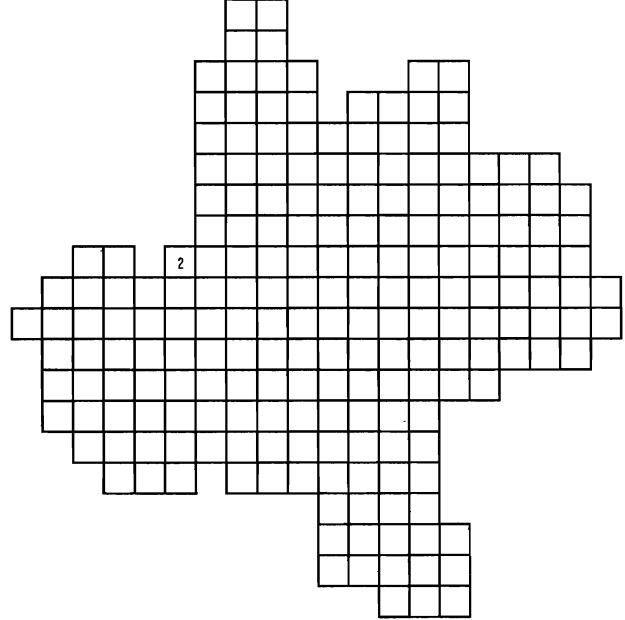
本種の繁殖環境は、亜高山帯の針葉樹林であるため、低標高の市域には繁殖環境はないので、移動途中の個体を記録したものと思われる。

センダイムシクイ

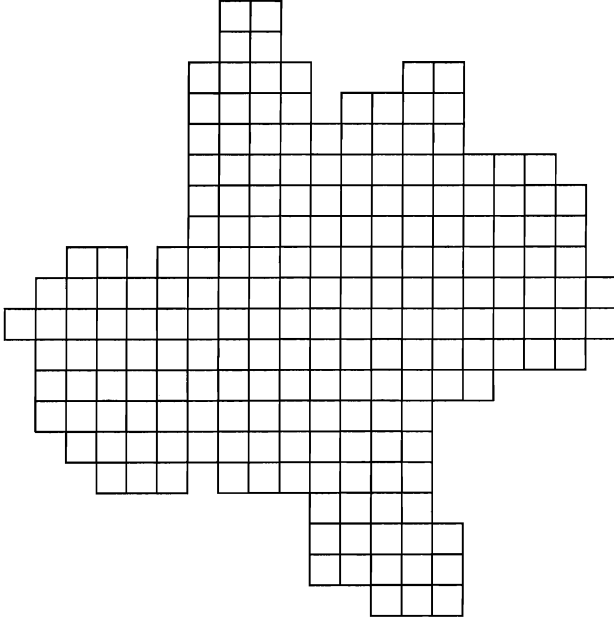
04年



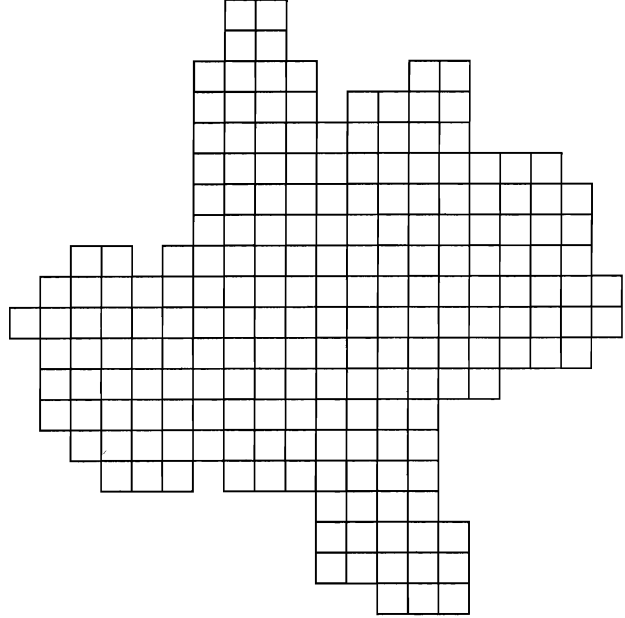
14年



84年



94年

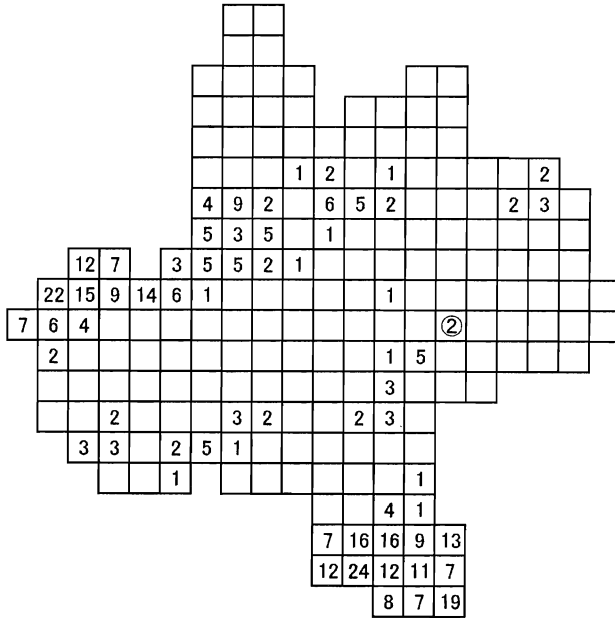


**58. センダイムシクイ *Phylloscopus coronatus***

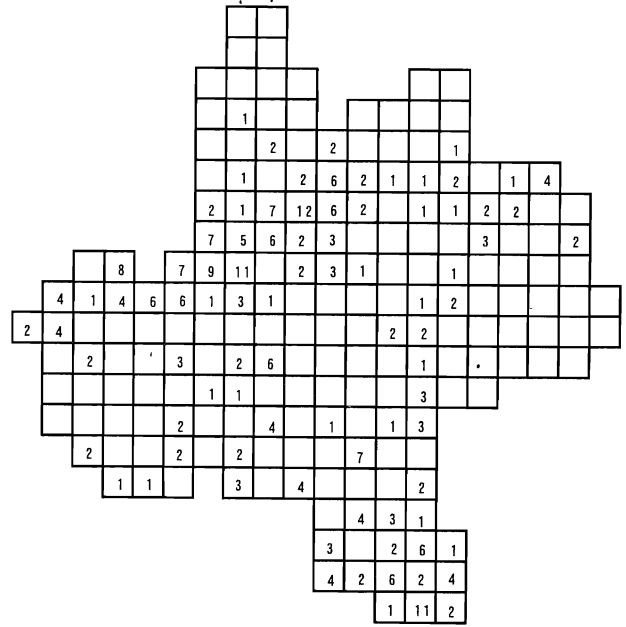
84年、94年には記録せず、04年には2メッシュ3羽、今回14年にも1メッシュ2羽を記録した。この出現状況では、移動途中の個体を記録したと思われるが、本種の棲息環境は丘陵の落葉広葉樹ならば該当すると思われるので、雑木林が伐採されず大本のある落葉広葉樹林が育ちつつあるので、少数が留まる可能性もある。今後の動向に注目していくことが大切である。

メジロ

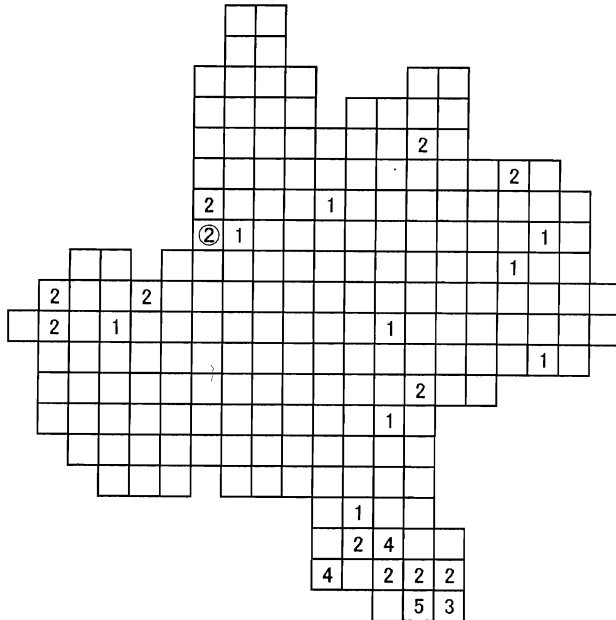
04年



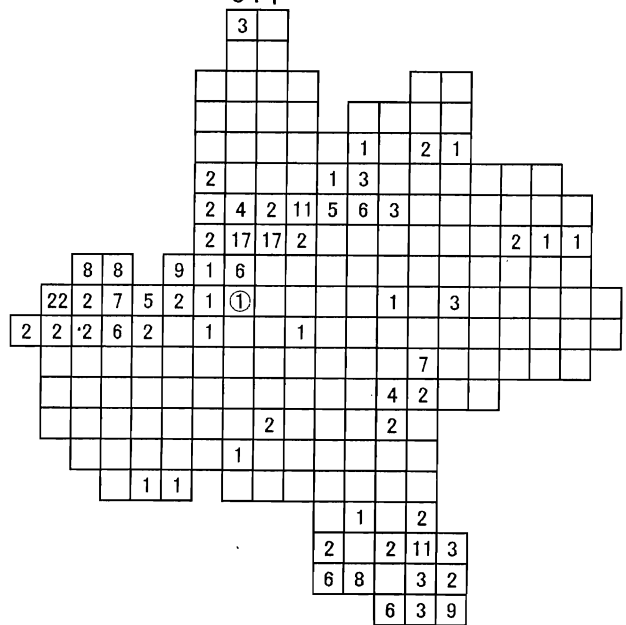
14年



84年



94年



### 59. メジロ *Zosterops japonicus*

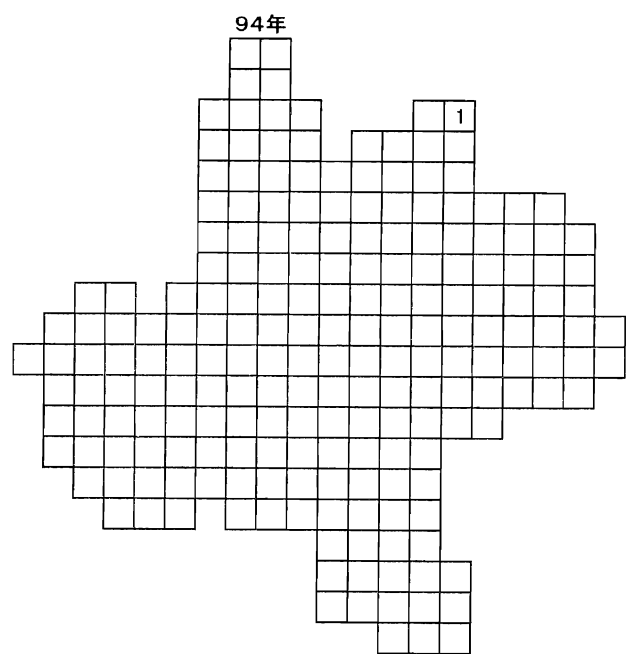
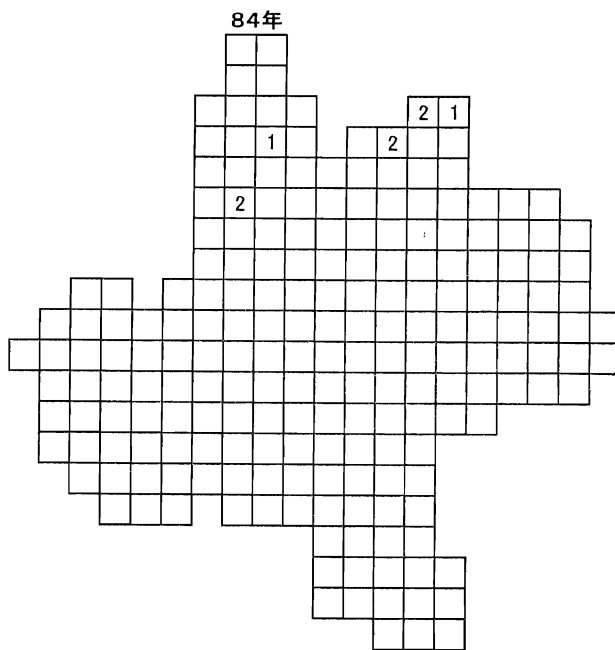
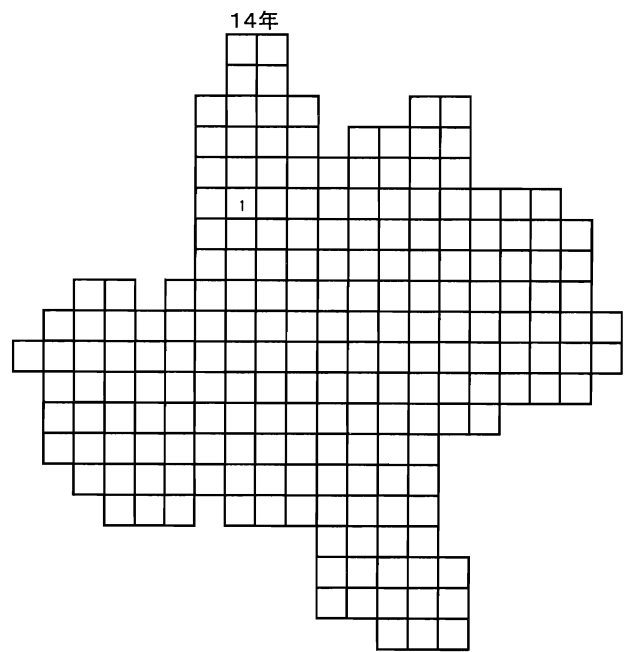
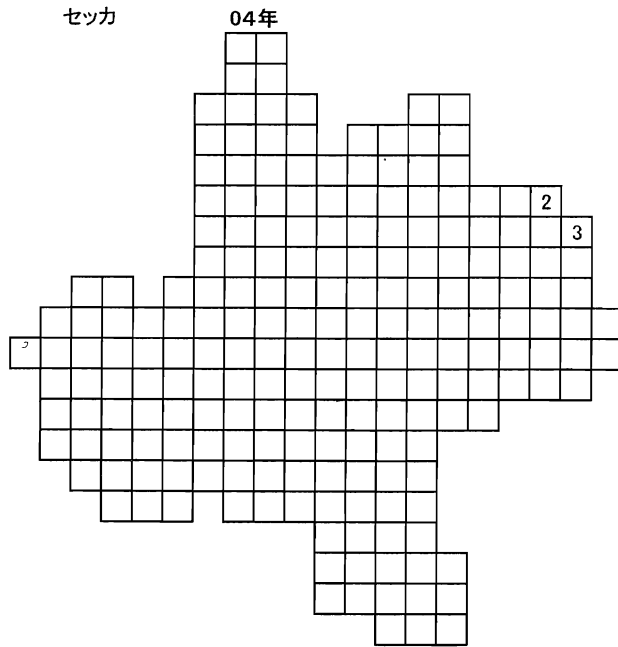
84年には25メッシュ63羽、94年には63メッシュ258羽、04年には65メッシュ380羽、今回14年にも89メッシュ277羽を記録した。84年に比較し94年では4倍に、04年では6倍に増加しており、14年では04年の0.73%に減少している。

加治丘陵・狭山丘陵の薪炭用の雑木林が4～50年伐採されず、大本のある落葉広葉樹林に育っていることが、メジロの増加に役立っていると考えられる。





セッカ

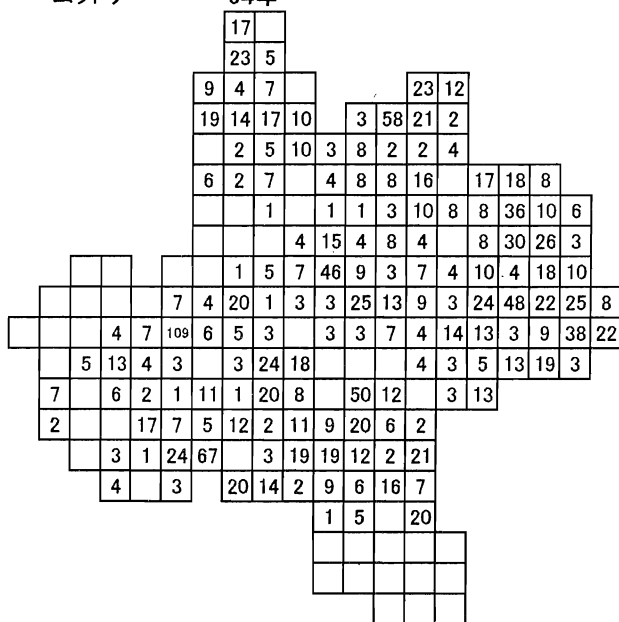


### 61. セッカ *Cisticola juncidis*

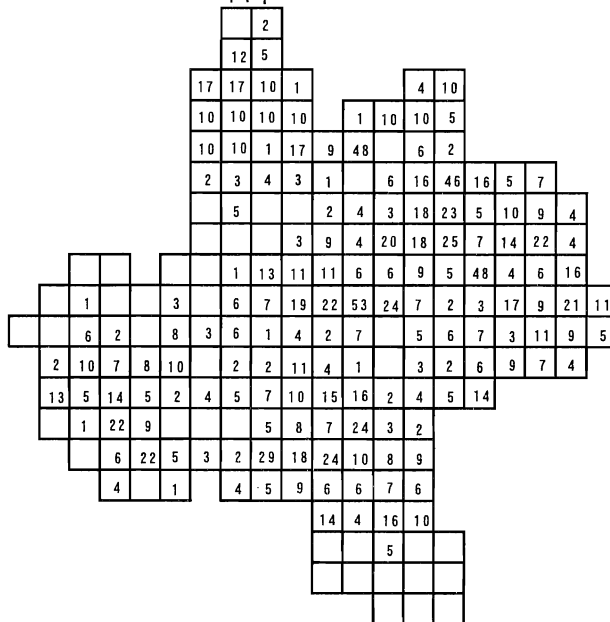
84年には5メッシュ8羽、94年には1メッシュ1羽、04年には2メッシュ5羽、今回 14年にも1メッシュ1羽を記録した。本種は背丈のある草地に棲息する。入間川の河川敷で人の利用ばかりが行われては本種の棲息環境は失われるばかりである。今後の増加は期待できない状況である。

ムクドリ

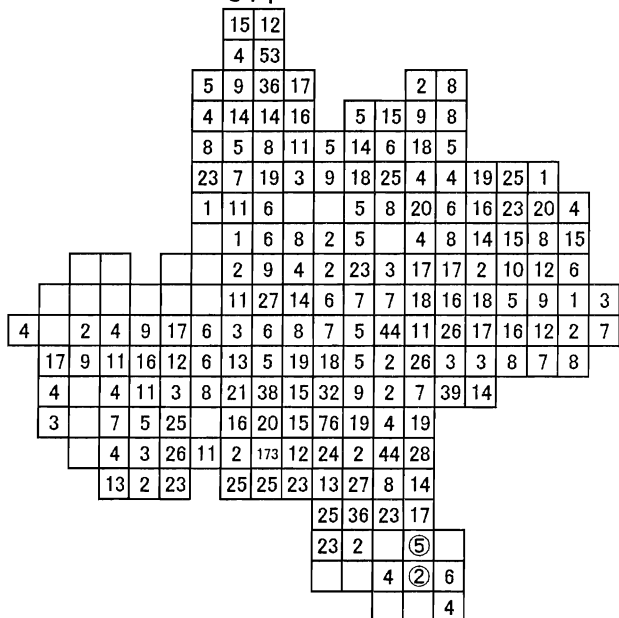
04年



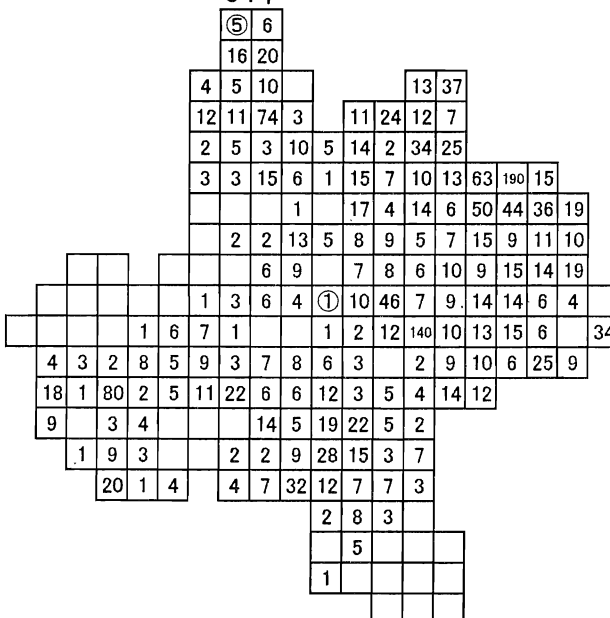
14年



84年



94年

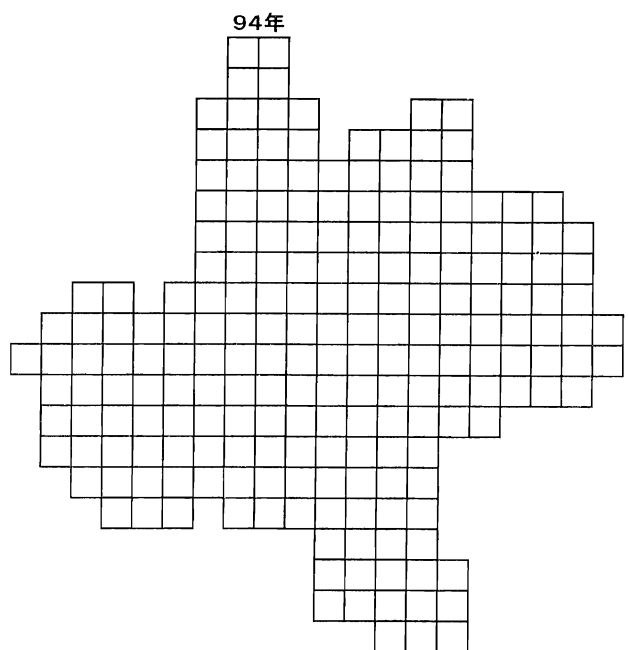
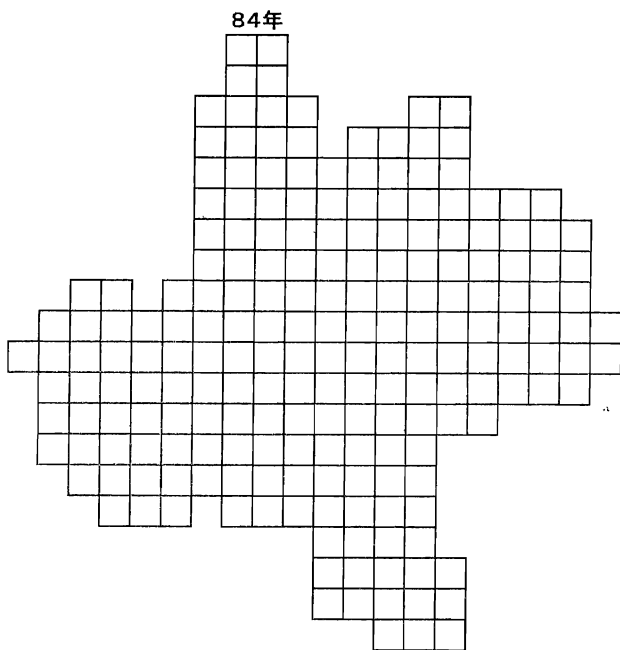
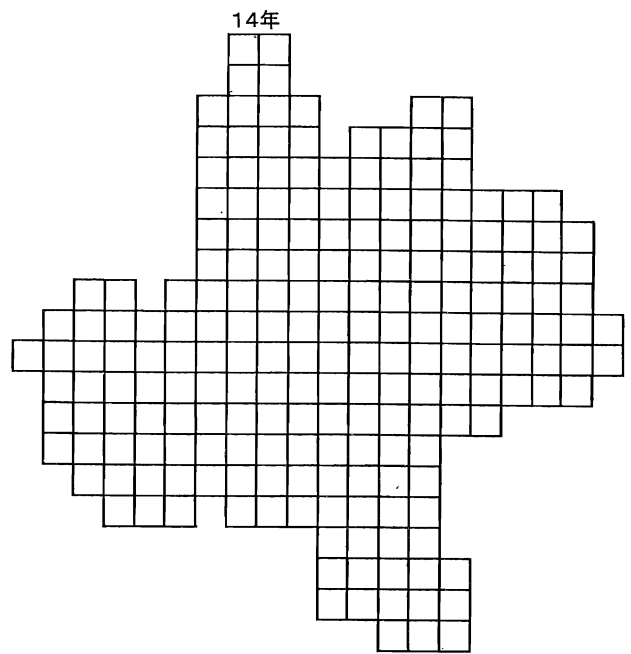
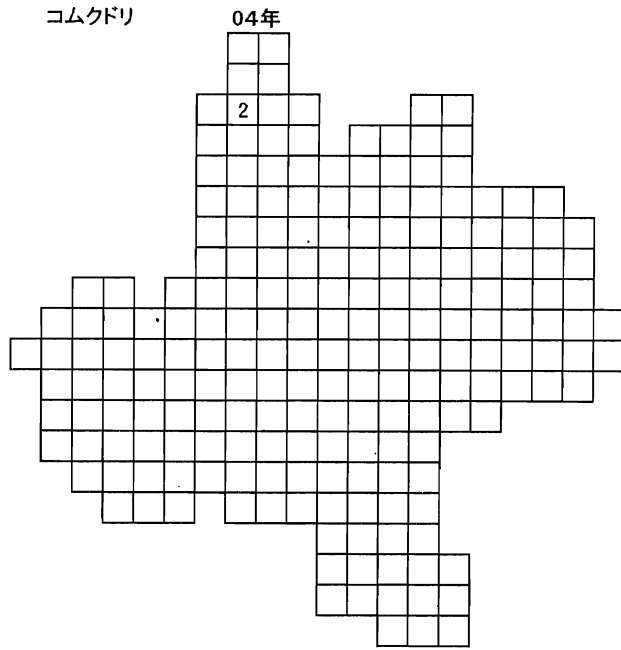


62. ムクドリ *Spodiopsar cineraceus*

84年には180メッシュ2,317羽、94年には161メッシュ2,070羽、04年には154メッシュ1,771羽、今回14年にも164メッシュ1,544羽を記録した。メッシュ(区画)数・個体数とも年を追って減少している。84年と比較し04年は76.4%(4分の3)に、14年は67%(3分の2)にまで減少している。

全国的に個体数が増えた、農業被害がある、街中の街路樹などに大群で囀をつくる(糞・鳴き声)など知らわれてきたので、2002年には狩猟鳥に加えられている。市域でも今後ともゆるやかに個体数は減少するものと考えられる。本種は農耕地域と住宅地域で多数が記録されていて、丘陵地の森林には棲息していない。

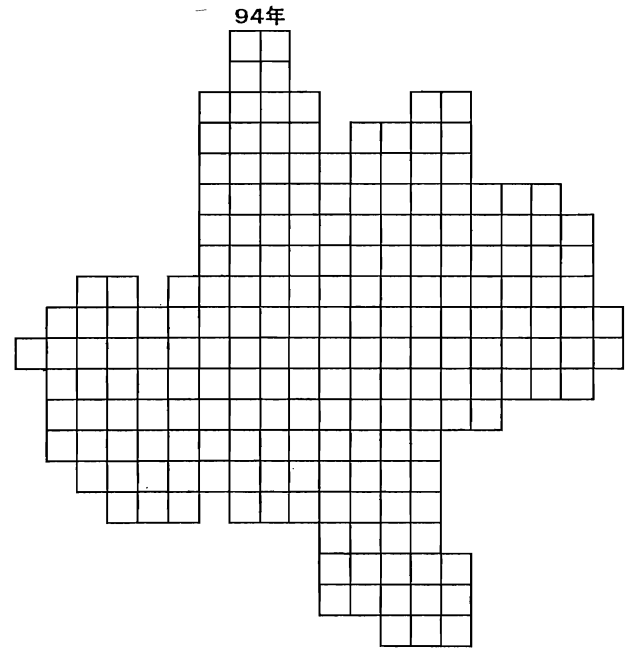
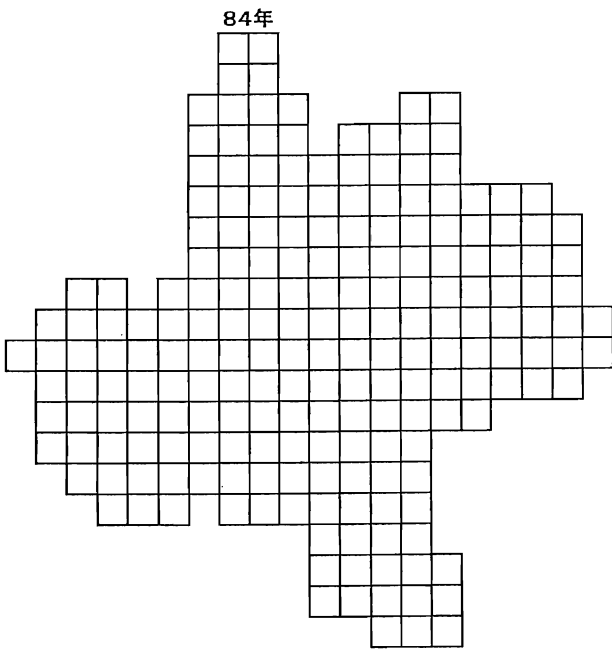
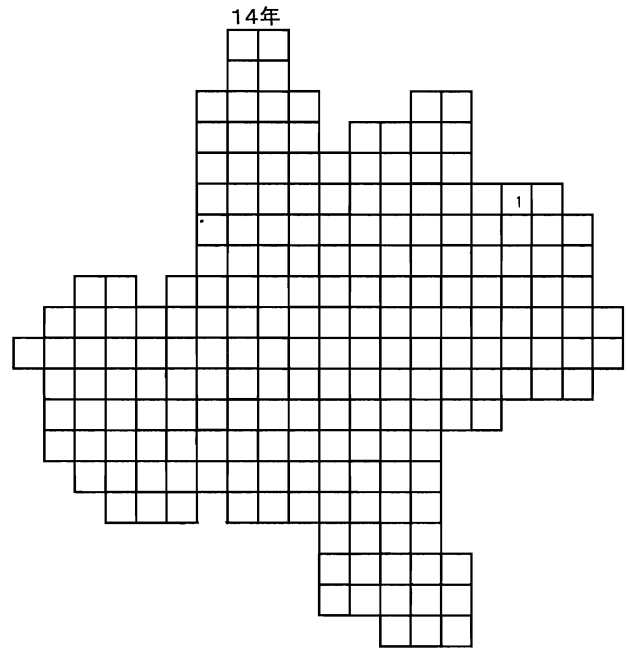
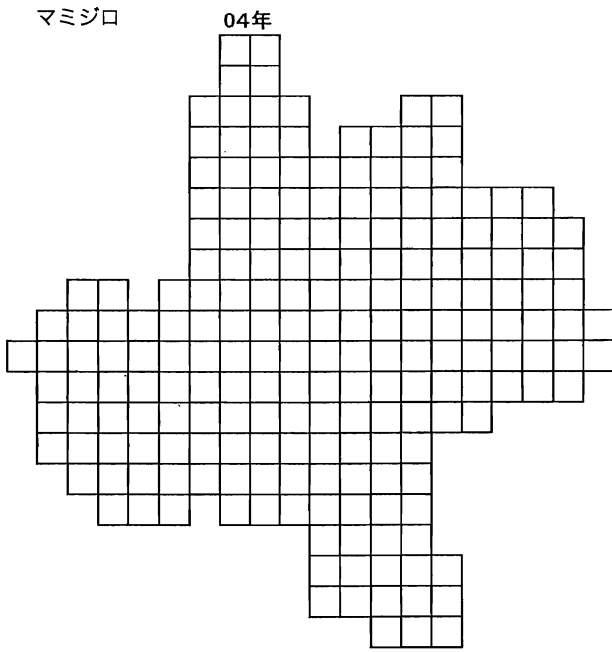
コムドリ



### 63. コムドリ *Agropsar philippensis*

04年に1メッシュ2羽を記録したのみで、84年、94年、14年には記録しなかった。当地では繁殖せず、移動の時期に通過するのみであり、04年の記録もそれに当たると思われる。

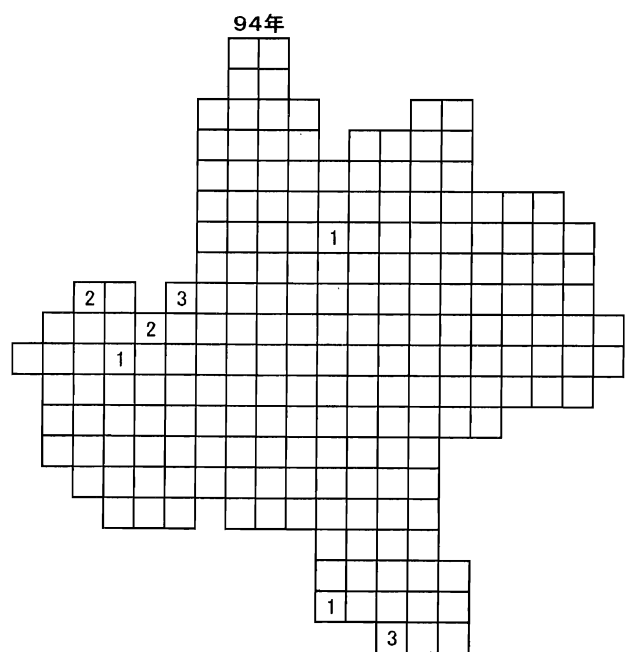
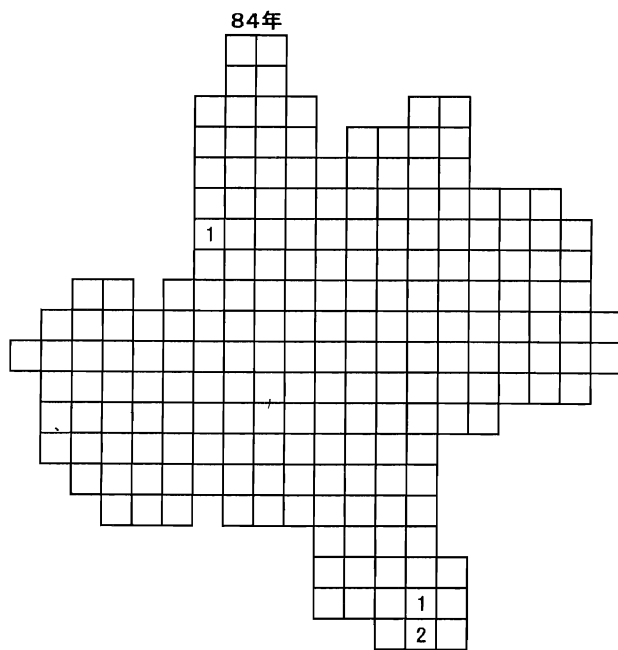
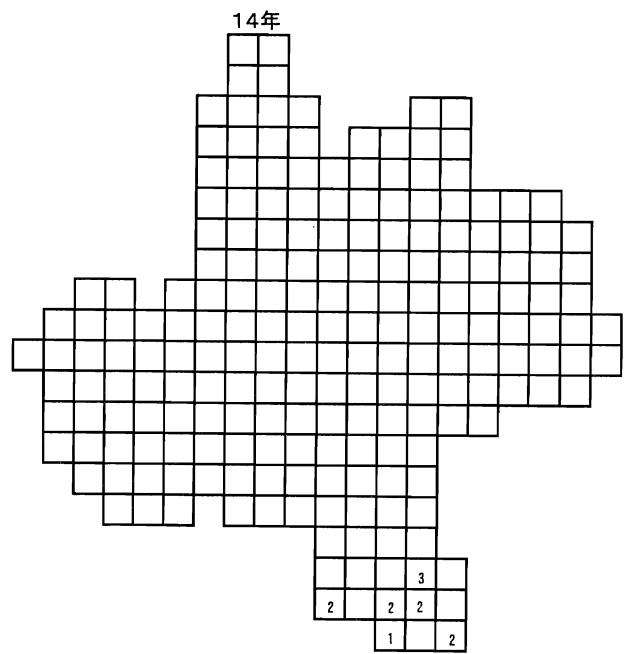
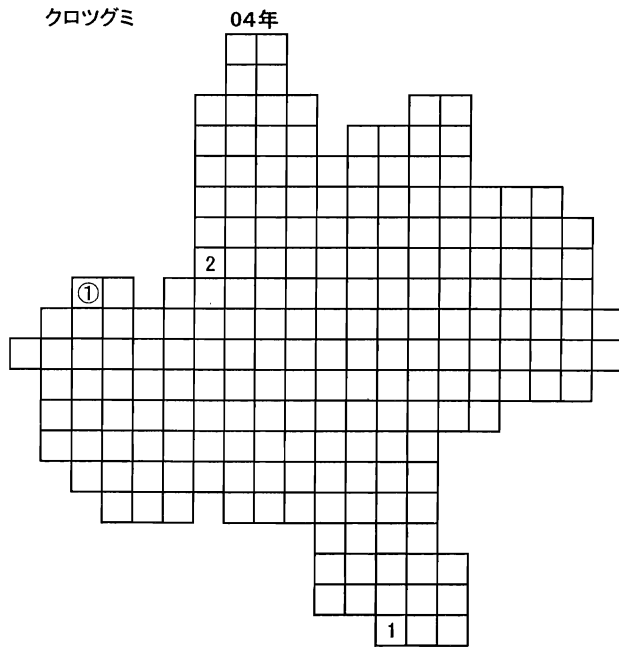
マミジロ



#### 64. マミジロ *Zoothera sibirica*

84年、94年、04年には記録せず、14年に1メッシュ1羽を記録した。日本では標高の高い地方の針葉樹林に棲息するが、市域のような低標高の森林で繁殖することは考えられないので、移動の時期に通過するのみであり、14年の記録もそれに当たると思われる。

クロツグミ



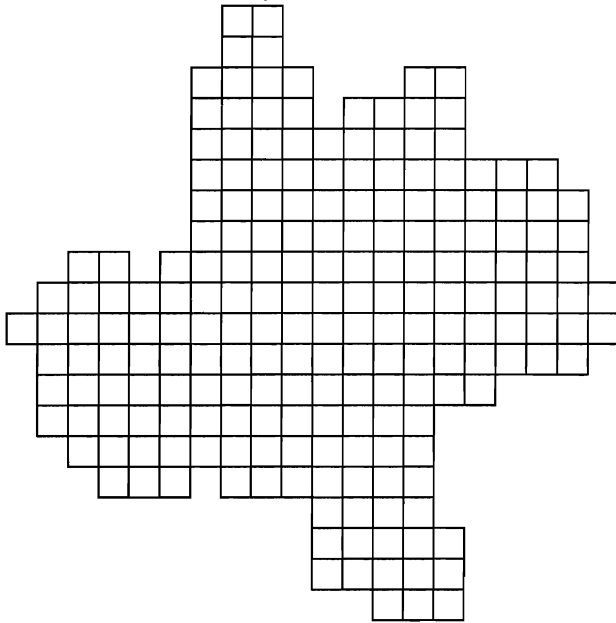
### 65. クロツグミ *Turdus cardis*

84年には3メッシュ4羽、94年には7メッシュ13羽、04年には3メッシュ4羽、今回14年にも6メッシュ12羽を記録した。本種の市域での繁殖は1980年夏に見つかっている。

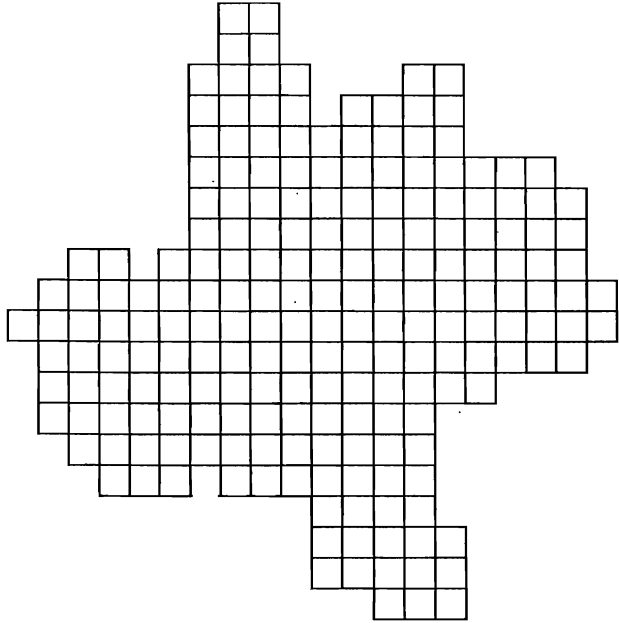
雑木林が落葉広葉樹林に育っていることで棲息環境が増えているとは思えるが、個体数の増加につながっていくかは不明瞭である。

コサメビタキ

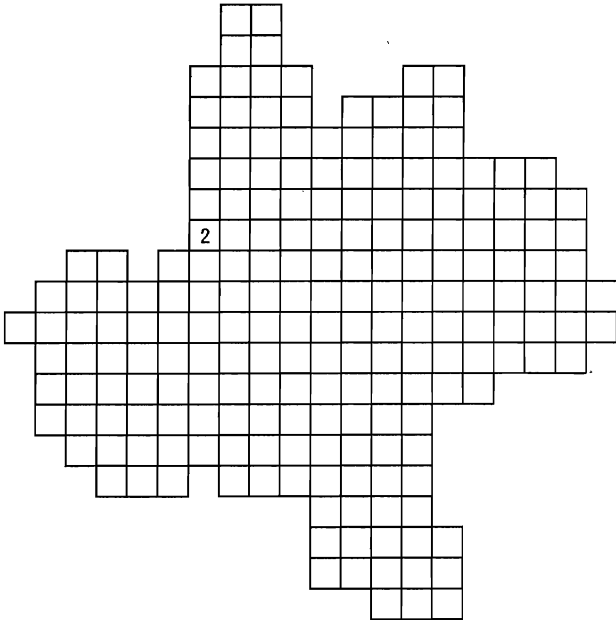
04年



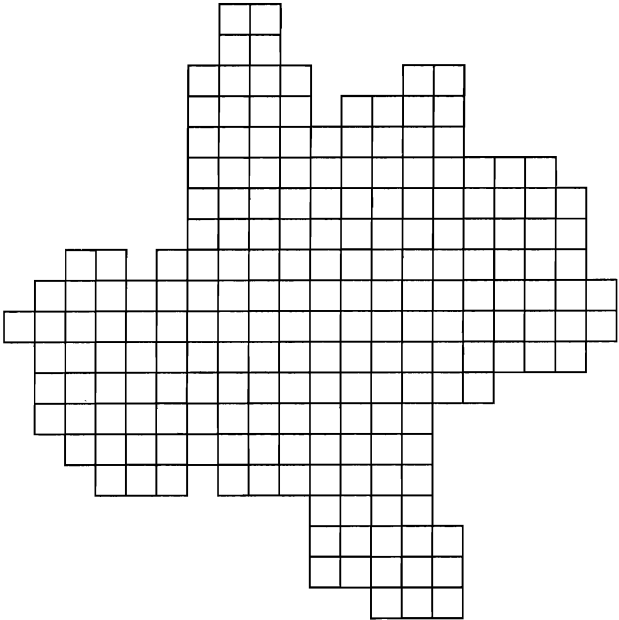
14年



84年



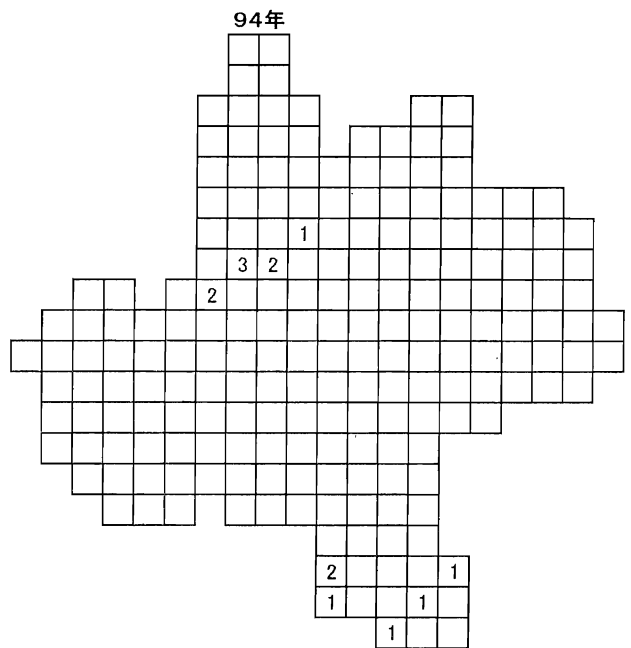
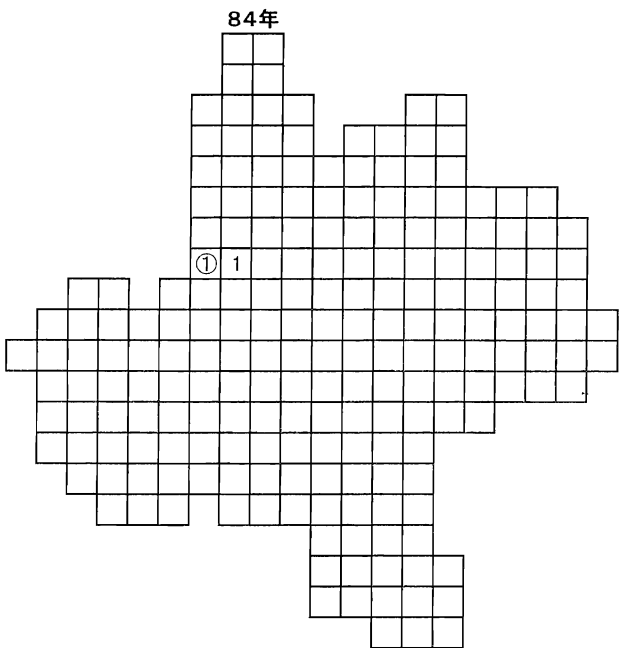
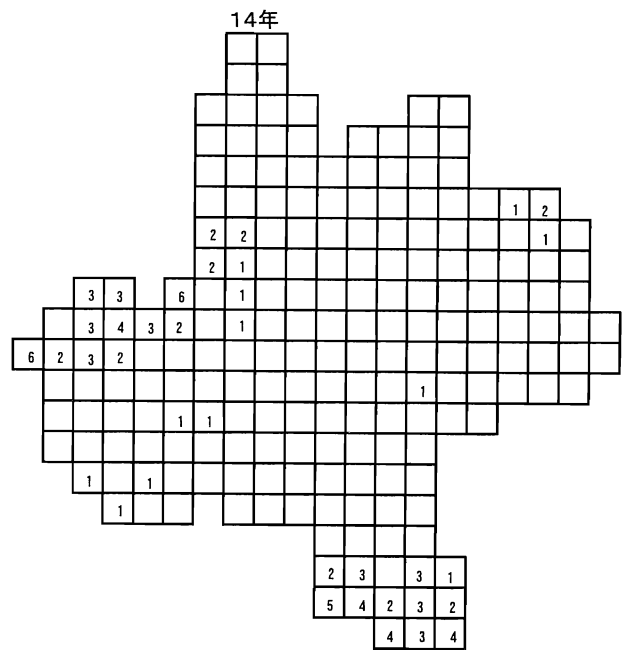
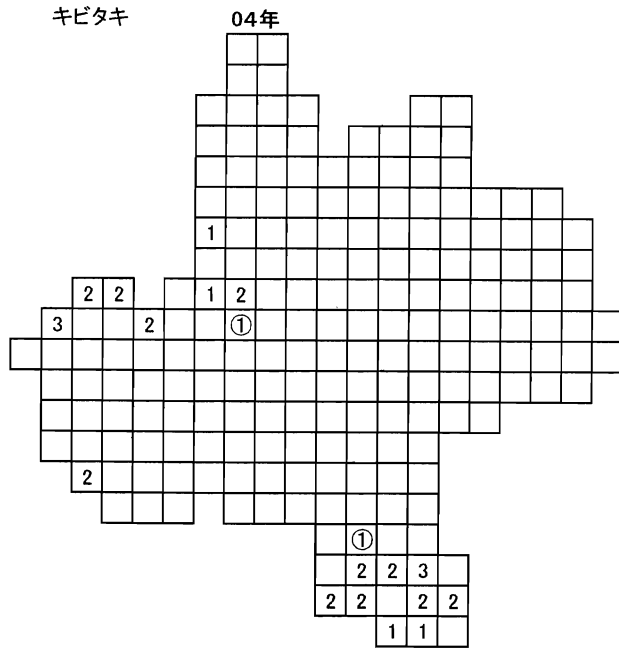
94年



## 66. コサメビタキ *Muscicapa dauurica*

84年には1メッシュ2羽を記録したが、94年、04年、14年には記録していない。標高、繁殖環境などから、市域での繁殖も考えられるが、84年に記録した以降に記録がないので、移動途中の個体が見られたと考えるのが普通と思われる。

キビタキ



67. キビタキ *Ficedula narcissina*

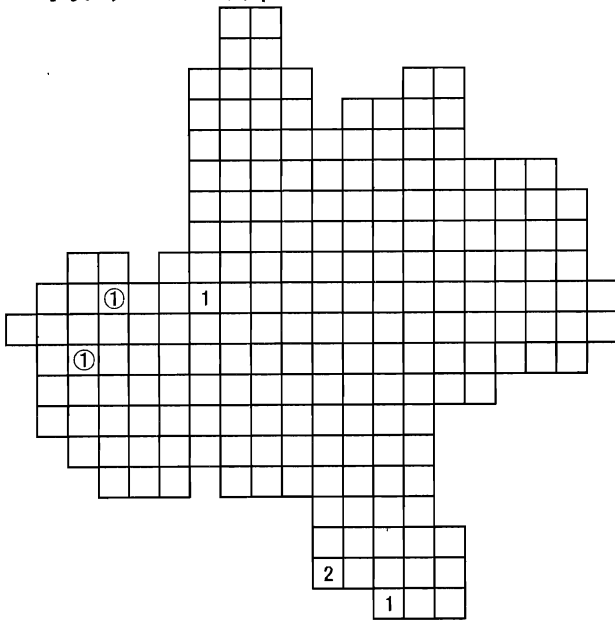
84年には2メッシュ2羽、94年には9メッシュ14羽、04年には19メッシュ34羽、今回14年にも38メッシュ92羽を記録した。14年は94年に比較して6.6倍、04年に比較しても2.7倍にまで増加している。

本種はよく繁茂した広葉樹林に棲息、繁殖する。薪炭用の雑木林が4～50年放置され続け、大木のある広葉樹林に成長していることが、本種の棲息環境を拡げている理由と思われる。

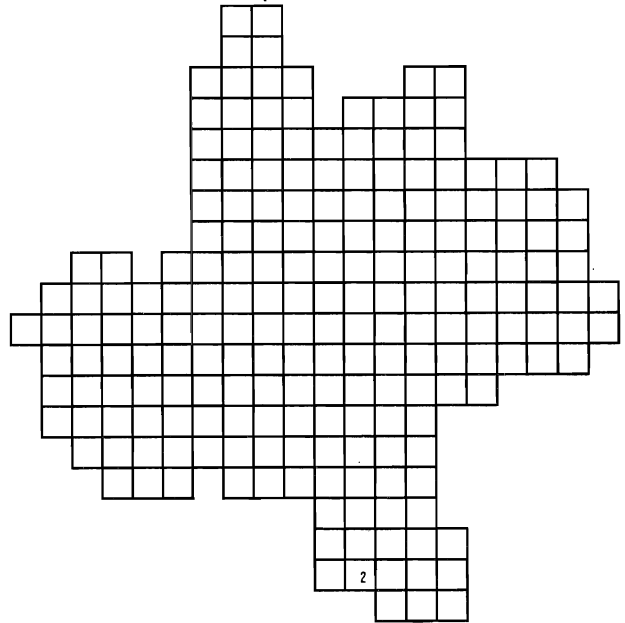


オオルリ

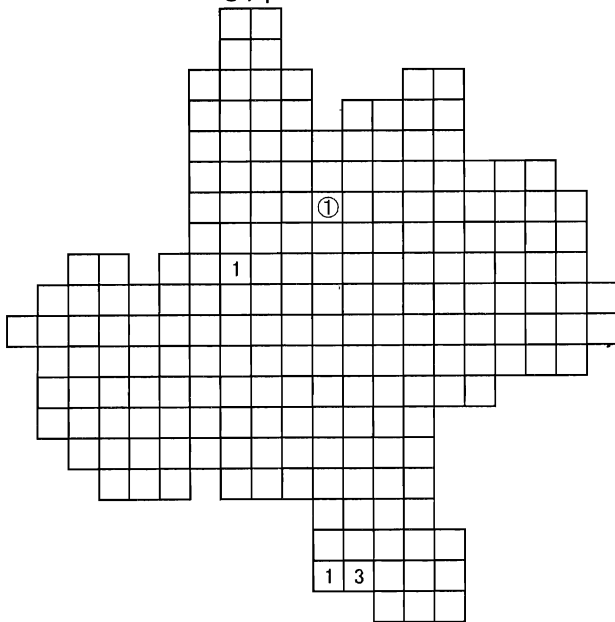
04年



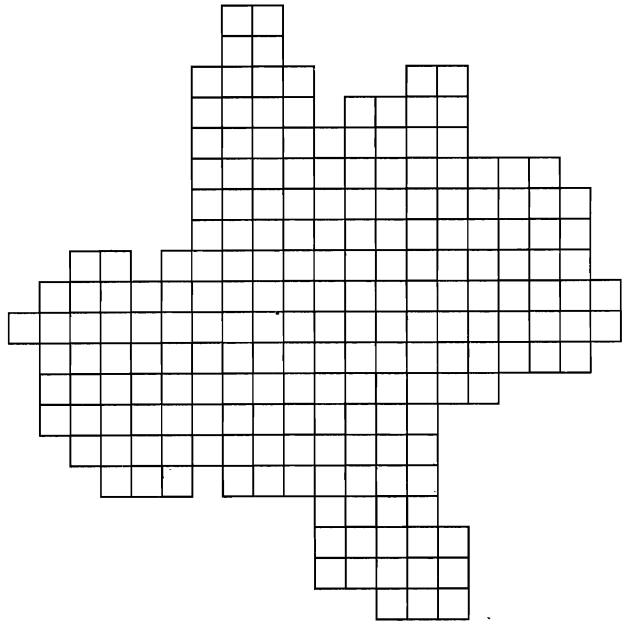
14年



84年



94年



### 68. オオルリ *Cyanoptila cyanomelana*

84年には4メッシュ6羽、94年には記録せず、04年には5メッシュ6羽、今回14年にも1メッシュ2羽を記録した。移動途中のものもいると思われるが、市域では少数が繁殖期に記録されている。また、繁殖例もある。今後も注目していく必要がある。

スズメ

04年

3	2																		
12	37																		
7	8	8	12			3	18												
6	38	21	14		8	10	8	6											
10	16	14	9	10	10	4	12	6											
7	8	9	9	3	15	20	13	17	18	11	11								
	6	13	5	2	9	7	17	52	14	11	13	23							
	2	8	24	7	2	6	39	57	12	14	13	29							
	2	6		5	4	8	26	26	15	15	20	18	25	12	13	15	32		
			4	81	21	23	38	14	12	27	55	26	6	5	15	20	14	20	
11	12	12	24	39	26	9	5	25	6	9	25	40	43	14	23	71	33	5	
30	16	34	15	30	50	15	34	25	11	39	6	38	75	18	63	27	28		
22	23	22	25	26	29	19	29	15	2	20	9	35	52	42					
30	41	32	61	92	40	32	35	33	33	22	30	71							
14	57	56	25	24	26	56	76	24	34	37	38								
40	17	85		49	66	43	59	27	17	25									
							30	42	32	35									
							18				4								

14年

3	7																		
7	12																		
15	26	19	8			10	14												
21	56	13	17		8	12	7	9											
8	19	20	12	12	7	8	12	9											
18	14	19	22	9	3	17	7	5	16	7	12								
5	12	6	15	5	12	9	7	13	25	13	9	2							
	3	6	20	15	15	14	7	10	8	11	5	15							
5			1	5		29	10	11	7	17	10	13	5	7	4	15			
	1			41	23	17	18	27	19	34	33	2	13	14	3	12	8	5	
6	8	7	11	42	16	16	11	17	7	10	16	13	16	20	6	8	17	14	
20	15	21	26	40	25	15	16	11	10	9	8	25	25	37	17	10	19		
30	38	11	71	14	18	15	66	14	10	8	10	28	87	18					
11	8	17	16	21	37	9	21	38	19	24	15	13							
4	49	59	12	10	18	75	94	30	9	30	12								
	36	21	10		42	72	24	16	26	37	33								
									40	49	14	13							
									15	2		12	8						
									2										

84年

8	18																		
27	26																		
15	5	26	57			16	24												
3	2	41	57		20	23	24	24											
22	30	81	56	74	19	18	37	24											
82	82	57	25	13	68	39	77	14	9	5	2								
14	26	35	10	2	2	22	30	31	32	20	19	5							
	7	24	26	10	38	13	14	62	22	26	27	56							
	2			4	9	32	27	18	18	19	19	30	19	19	35	12			
			3	10	29	48	80	29	9	13	17	22	40	20	25	16	9	12	
2		2	4	22	36	57	2	11	6	17	14	26	18	26	31	12	29	16	18
2	16	3	9	34	11	20	13	34	17	20	16	19	22	28	5	12	11		
10	19	16	44	14	29	24	51	16	32	35	24	39	48	109					
	10	9	5	26	20	2	13	46	65	19	80	29							
	22	9	8	20	14	24	7	52	59	20	52	23							
	88	77	38		50	43	74	40	24	46	29								
							79	120	37	27									
							86	36	16	13	10								
							14			7	3								
											17	6							

94年

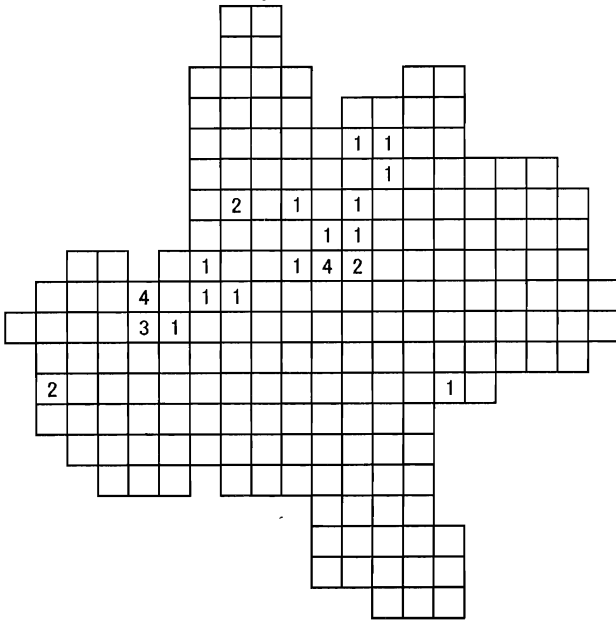
6	10																		
17	15																		
16	1	10	15			2	38												
25	65	11	15		10	33	21	9											
23	10	12	25	38	18	16	38	23											
40	12	20	23	9	4	17	14	21	35	5	1								
1	8	12	17	2	30	13	31	18	20	40	18	8							
	25	52	36	40	33	16	52	42	53	44	10	23							
			2		9	12	11	36	16	39	58	26	44	21	22	19			
				1	49	18	12	30	17	19	12	34	8	27	19	28	30	11	25
6	5	9	20	76	36	9	30	8	1	17	19	2	9	15	19	39	25	38	
27	26	32	11	33	34	16	48	33	35	3	4	16	12	13	39	29	24		
31	35	17	15	27	39	55	94	53	3	18	2	29	6	15					
17	9	17	47	70	69	51	36	54	68	38	11	3							
63	73	61	127	31	15	83	61	36	25	25	66								
	104	59	58		42	74	77	83	48	69	51								
								86	96	67	64								
								63	13	10	5								
								1	3										

69. スズメ *Passer montanus*

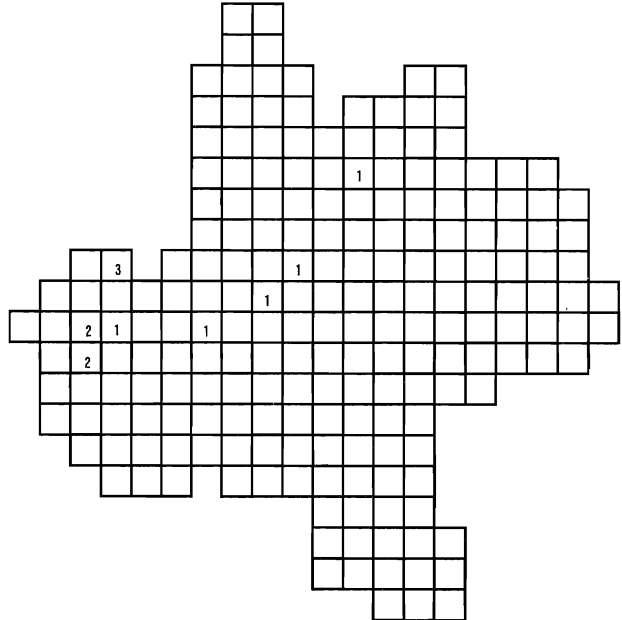
84年には194メッシュ5233羽、94年には191メッシュ5512羽、04年には188メッシュ4395羽、今回14年にも190メッシュ3362羽を記録した。年を追うごとに減少し続けており、14年では84年の64%程度にまで減少している。それでも市域ではメッシュ(区画)数・個体数ともが最も多い鳥になっている。住宅地域では個体数が少なめで、農耕地域では多めである。市域の加治丘陵・狭山丘陵のよく繁った林には棲息していない。

キセキレイ

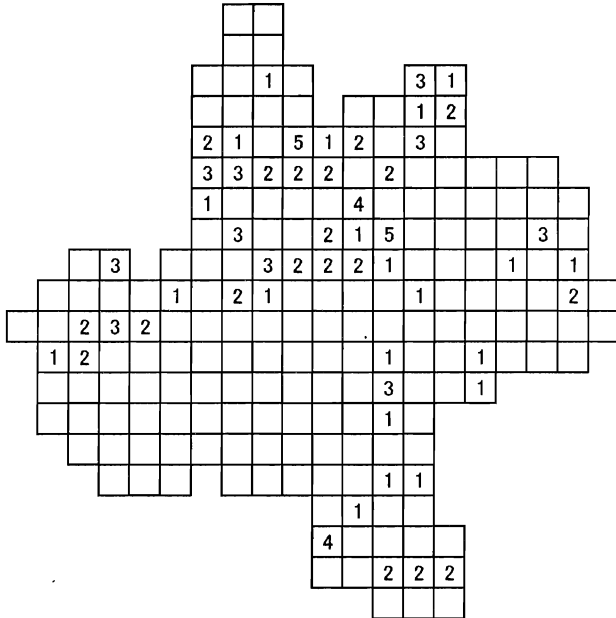
04年



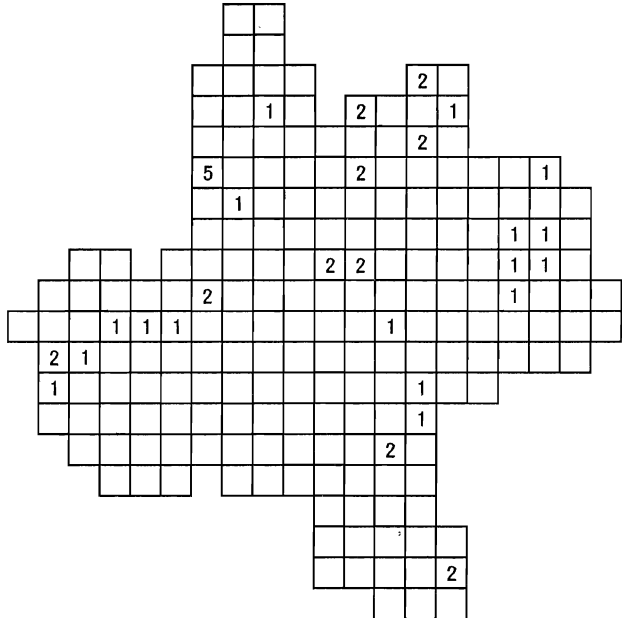
14年



84年



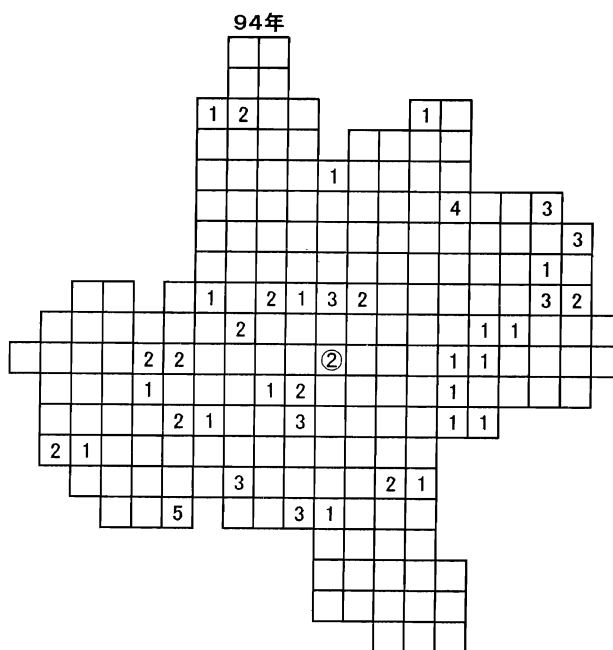
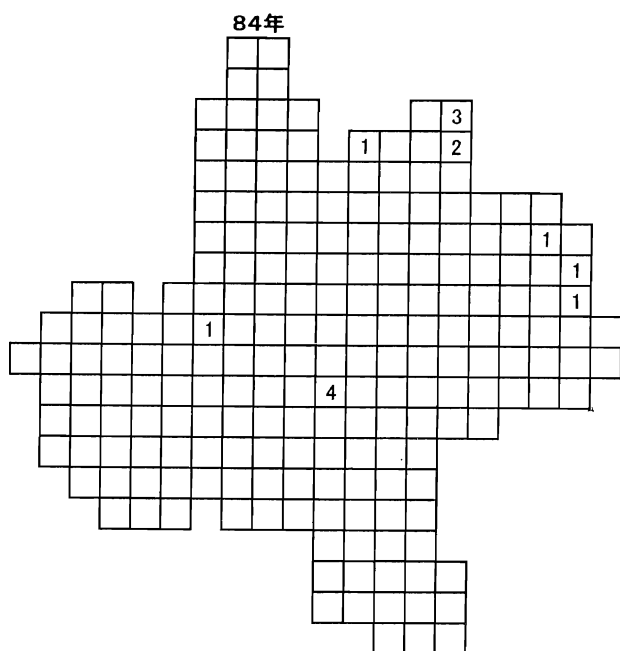
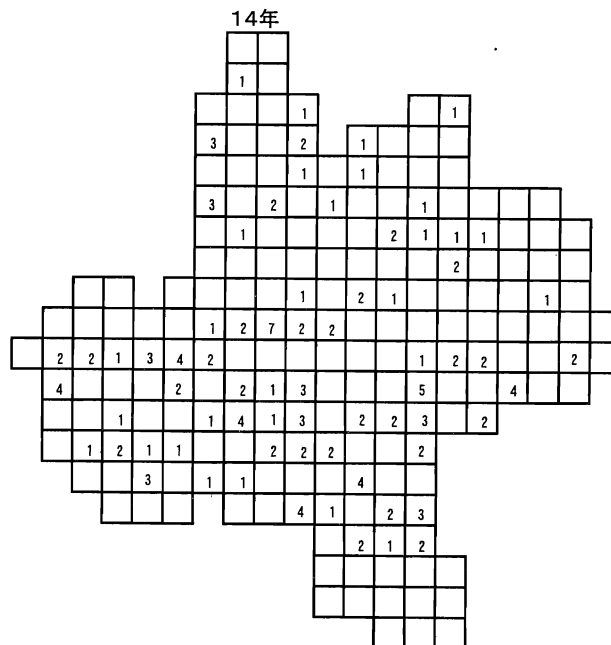
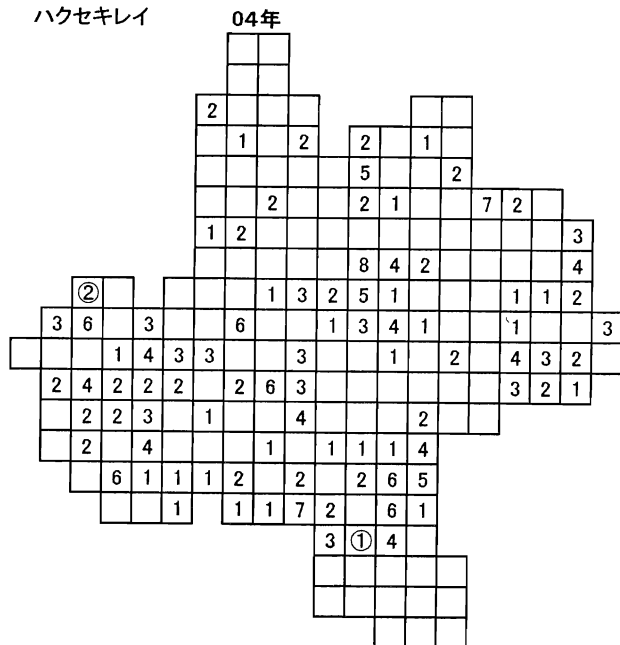
94年



70. キセキレイ *Motacilla cinerea*

84年には54メッシュ107羽、94年には28メッシュ43羽、04年には19メッシュ30羽、今回14年にも8メッシュ12羽を記録した。年を追って減少しており、84年に比較し14年では11%にまで減少している。本種は水系と密接な関係があり、市域の川など水系の長さは変わらないにもかかわらず、個体数は急減している。冬鳥であったハクセキレイが市域で繁殖し始めたのは1980年代、以降の急速な増加によって競合が考えられるキセキレイ・セグロセキレイの個体数が反比例するように減少している。今後の状況を注目していく必要がある。

ハクセキレイ



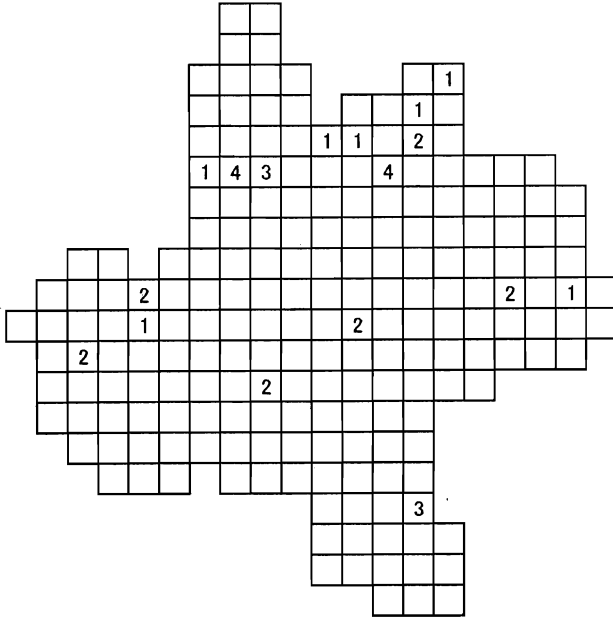
71. ハクセキレイ *Motacilla alba*

84年には8メッシュ14羽、94年には40メッシュ73羽、04年には91メッシュ236羽、今回14年にも72メッシュ143羽を記録した。84年に比較し94年では5.2倍、04年では16.9倍にまでの急激な増加をしている。14年では04年よりも減少しているが、それでも84年の10.2倍、94年の2倍もの個体数である。

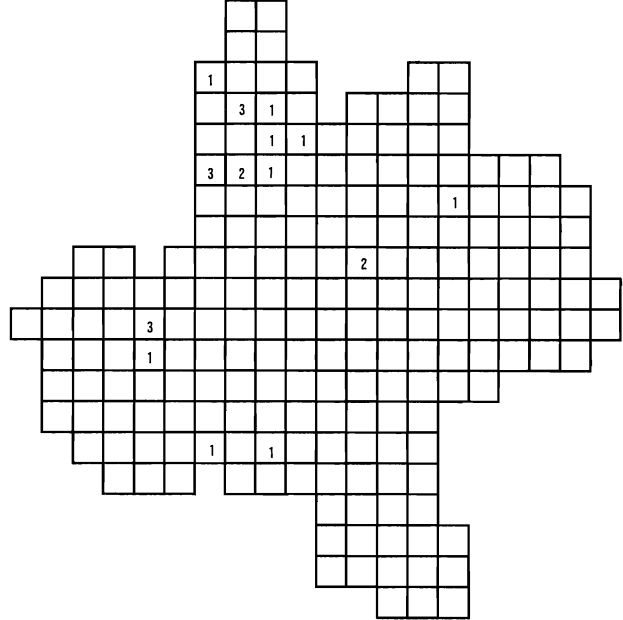
本種は50年以上もの間、繁殖地を南下させ、分布を拡げてきた。この全国的な傾向を裏付ける結果になっている。水系を主要な生息地としているが、舗装された道路とか工場敷地、駅プラットホーム、埋立地、背の低い草地(芝生)など水系から離れた場所でも棲息が可能であり、工場建物の隙間などで繁殖するものが増加している。本種の急激な増加が、棲息環境が競合しているセグロセキレイ・キセキレイに対して大きな圧力になっていることが想像できる。この3種の状況については今後も注目していく必要がある。

セグロセキレイ

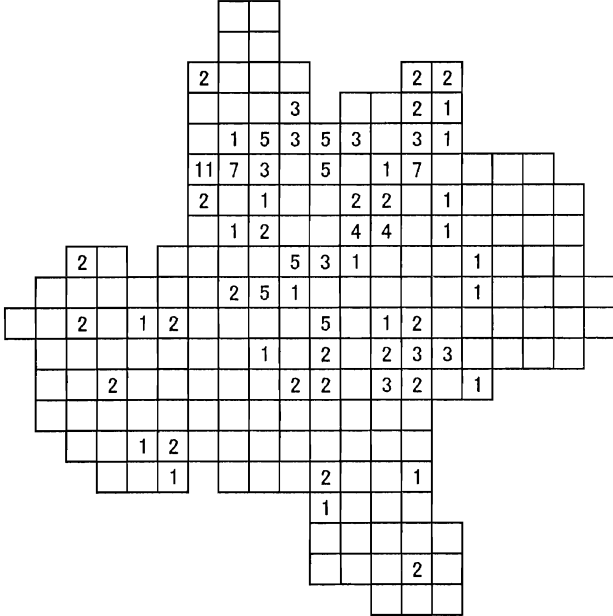
04年



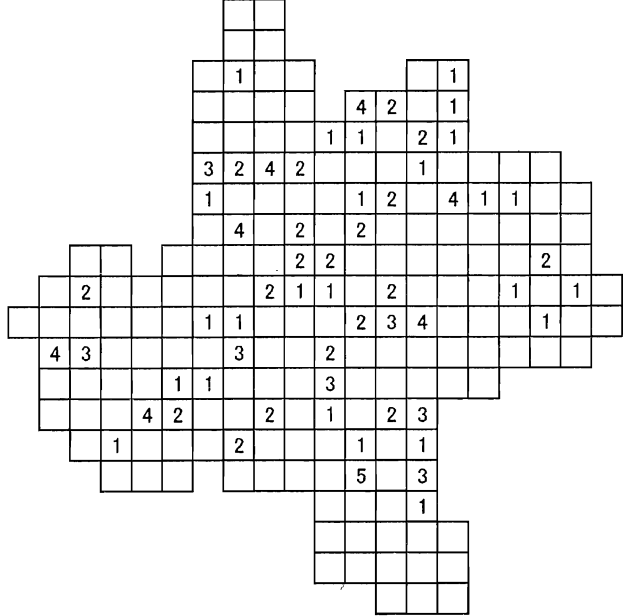
14年



84年



94年

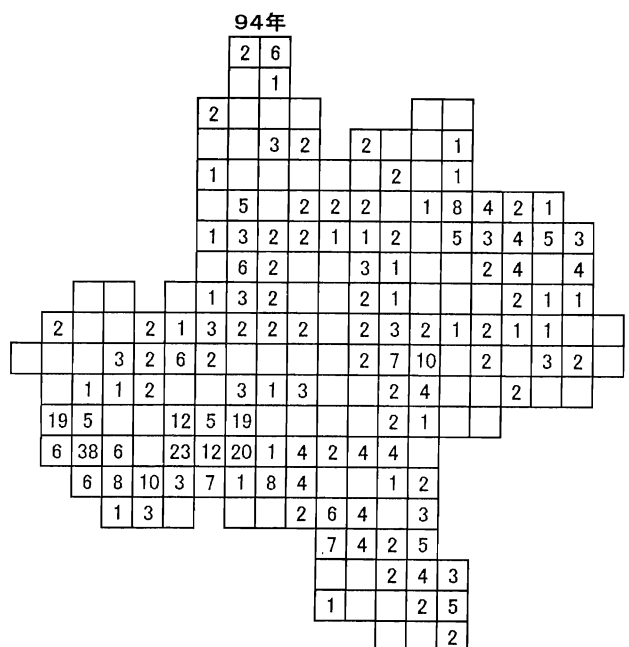
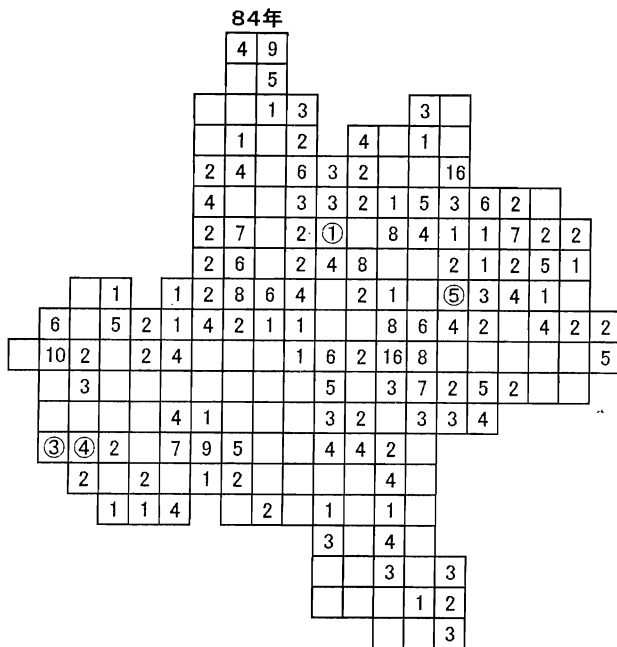
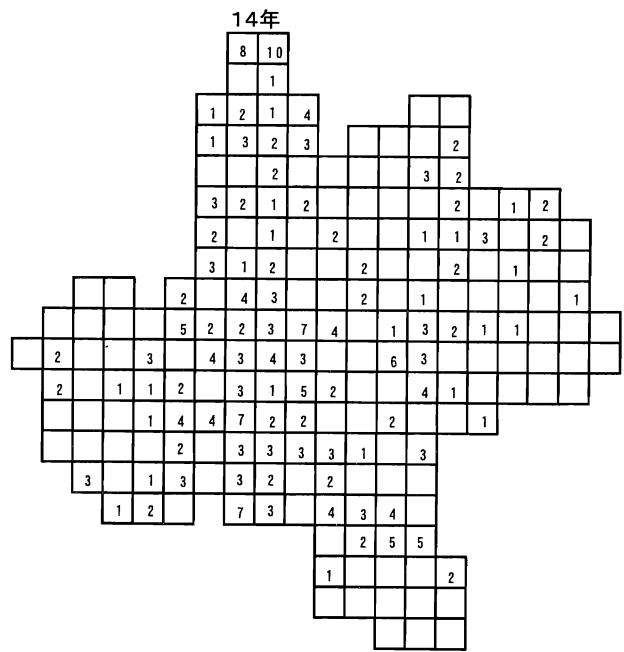
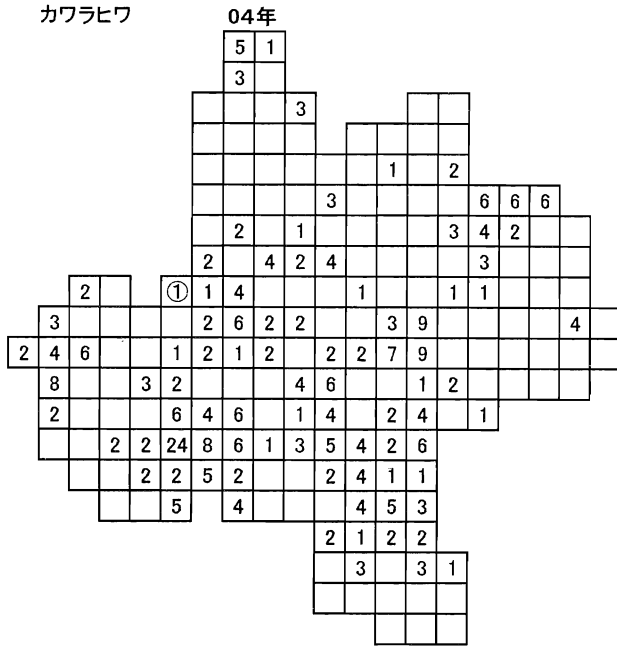


72. セグロセキレイ *Motacilla grandis*

84年には62メッシュ154羽、94年には59メッシュ118羽、04年には17メッシュ 33羽、今回14年にも14メッシュ21羽を記録した。調査の度に急激に減少している。84年に比較し、94年では76.6%にまで減少し、04年では21.4%、14年では13.6%にまで減少している。

本種は水系を主な棲息環境にしており、河川や池沼の水際を採餌場所としている。市域の主要な河川での減少が明瞭であるため、近年急激に増加しているハクセキレイとの競合によっているものと考えられる。日本特産種といえるほどの種であるため、今後の動向には十分注意していく必要がある。

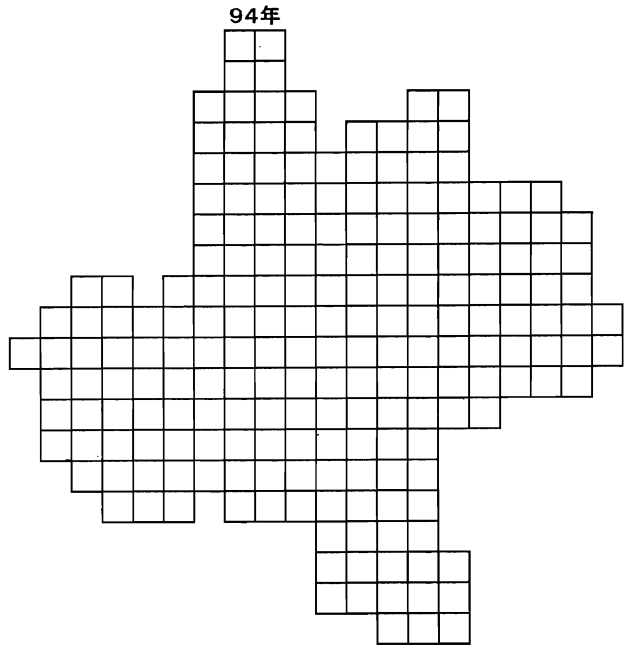
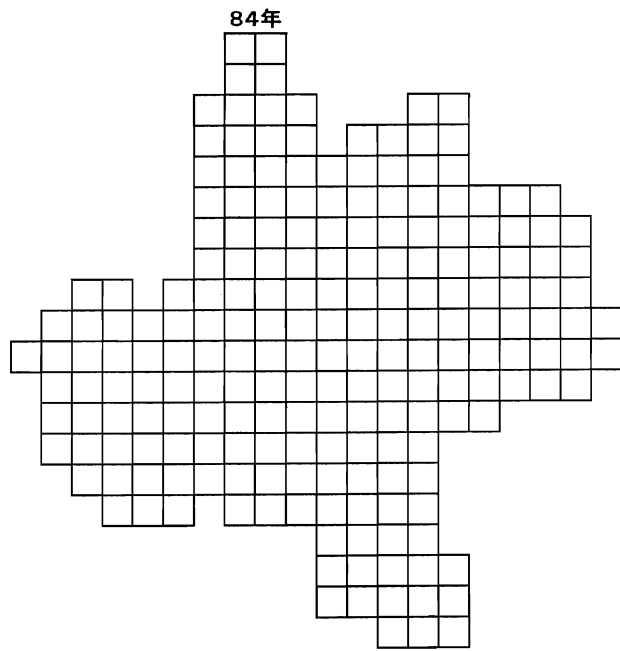
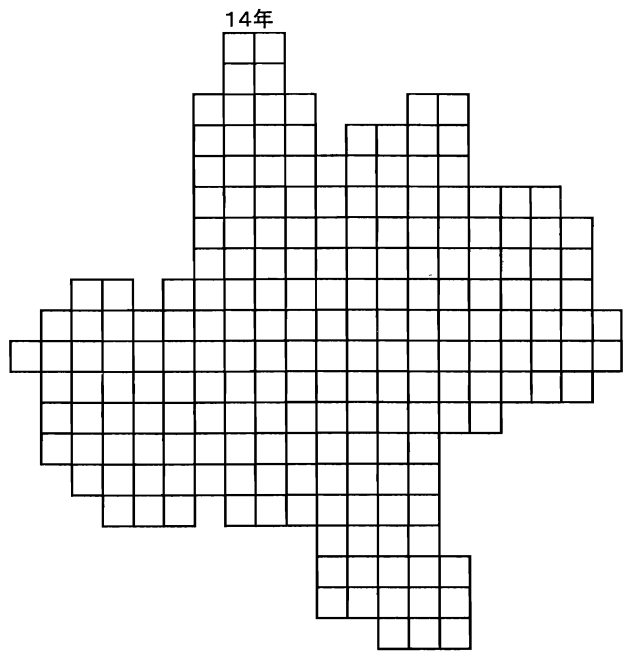
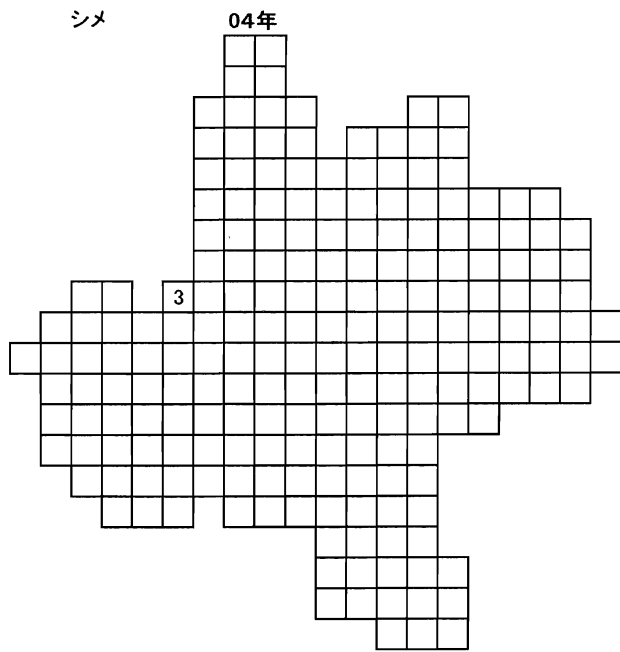
カワラヒワ



73. カワラヒワ *Chloris sinica*

84年には124メッシュ436羽、94年には125メッシュ490羽、04年には93メッシュ316羽、今回14年にも102メッシュ269羽を記録した。84年に比較し94年では約 12パーセントの増加であるが、04年には84年の72. 5%、14年には84年の61. 7%にまで減少している。

本種は住宅地・市街地・屋敷林・社寺林・林の林縁などに棲息し、街路樹・庭木・公園木などでも営巣している。市街化区域での減少が目立っているので、緑地の保全、公園の確保などで対応できることも考える必要がある。



**74. シメ *Coccothraustes coccothraustes***

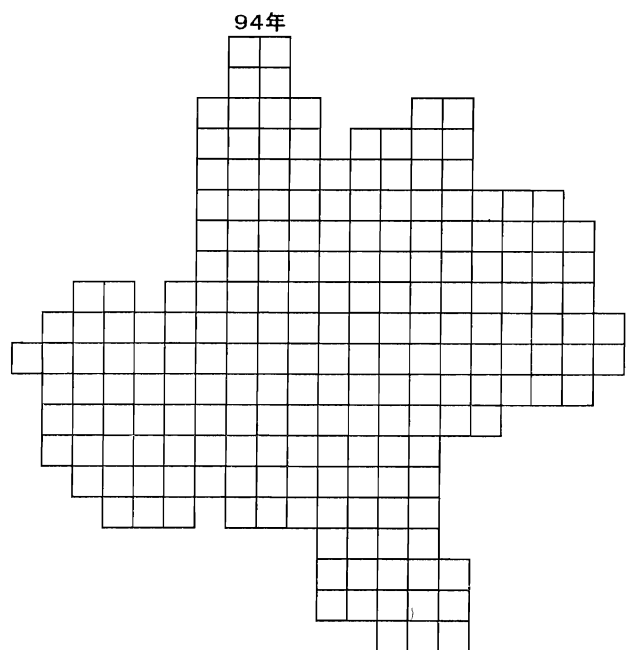
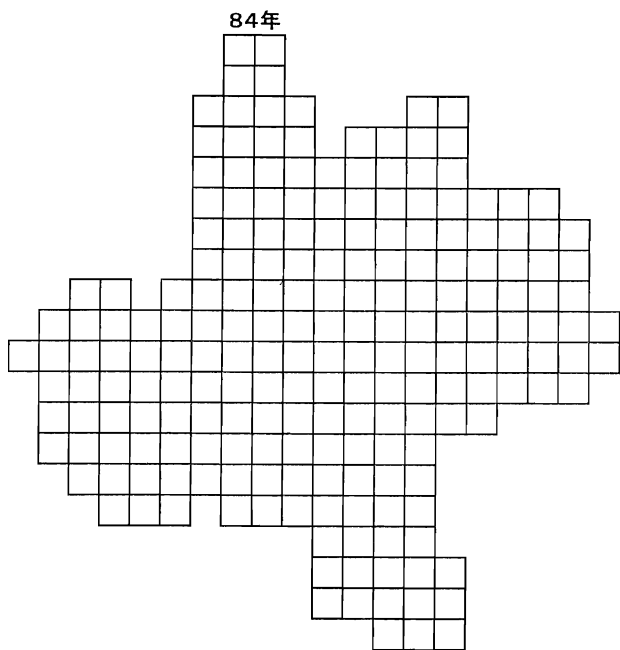
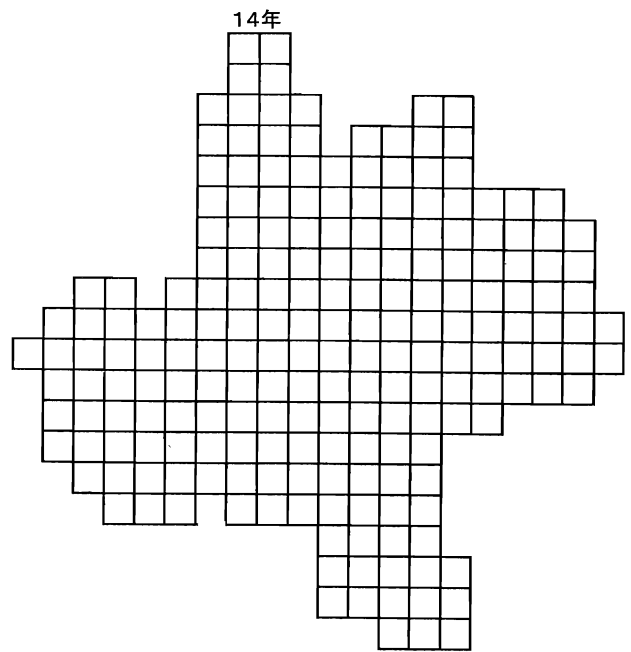
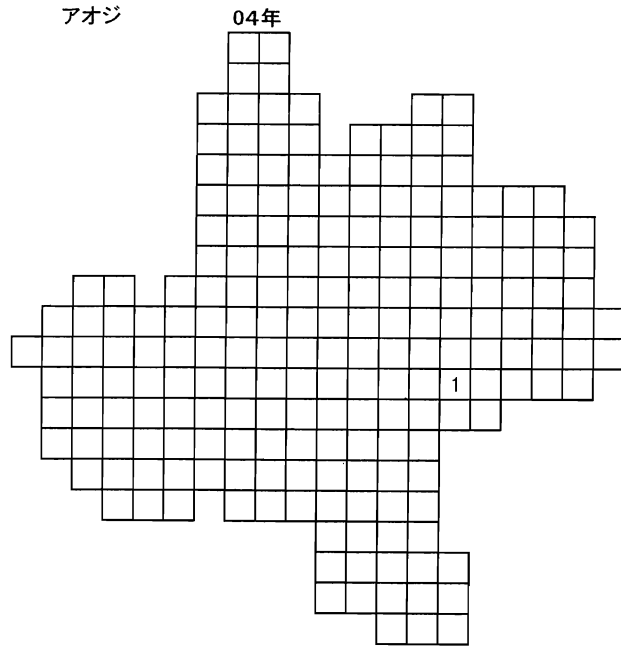
04年に1メッシュ3羽を記録し、84年、94年、14年には記録しなかった。本種は北海道以北では繁殖しており、本州では東北地方で知られている。関東地方では繁殖しておらず、04年の記録は移動途中のものと思われる。







アオジ



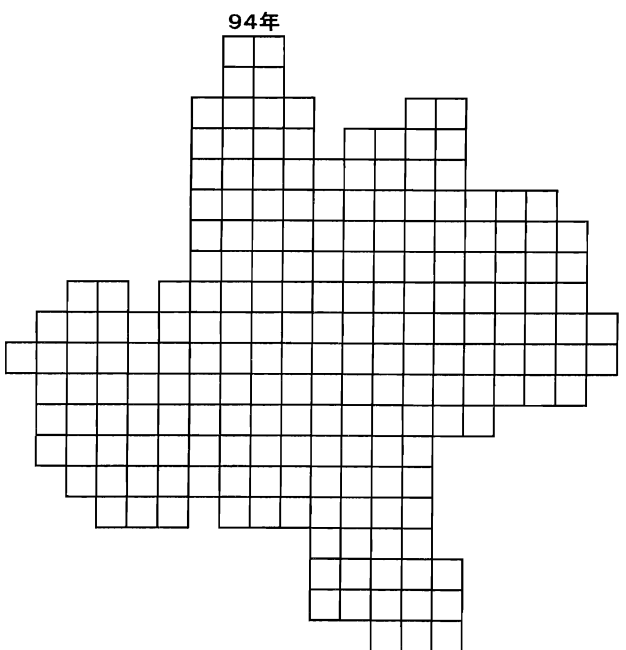
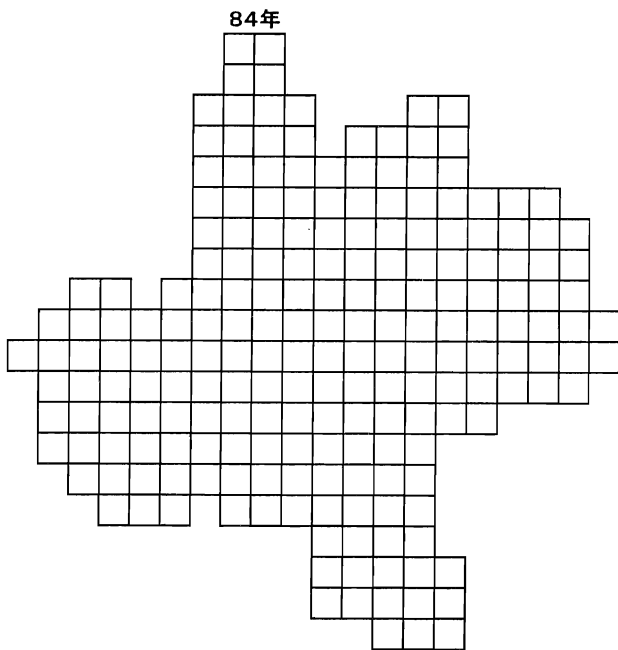
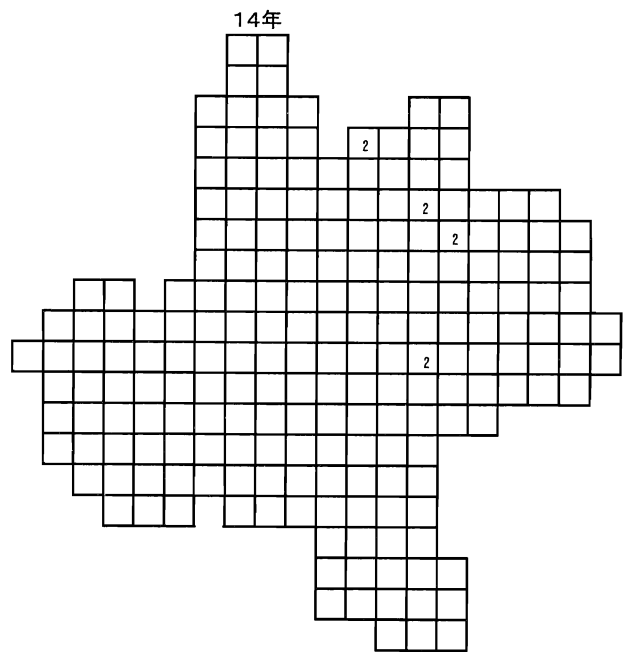
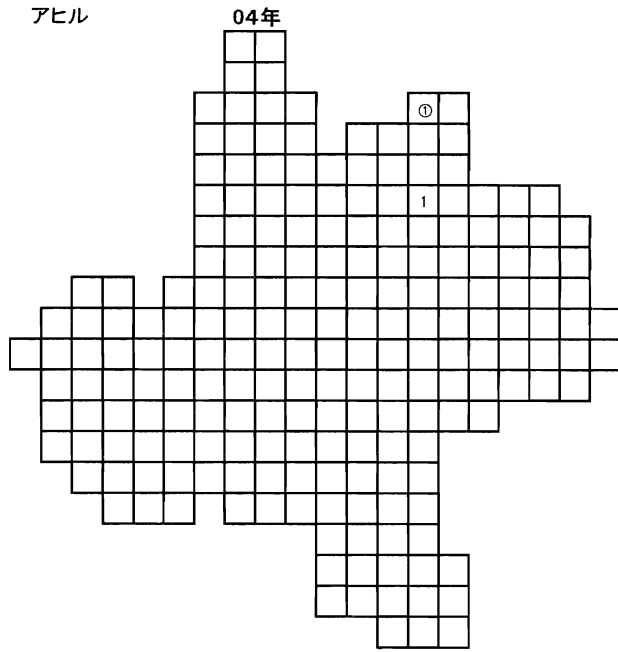
### 77. アオジ *Emberiza spodocephala*

04年に1メッシュ1羽を記録し、84年、94年、14年には記録しなかった。

関東地方でも標高500m以上の山地では繁殖しているが、低標高の市域では繁殖の可能性はなく、04年の記録は移動途中のものが記録されたと思われる。



アヒル



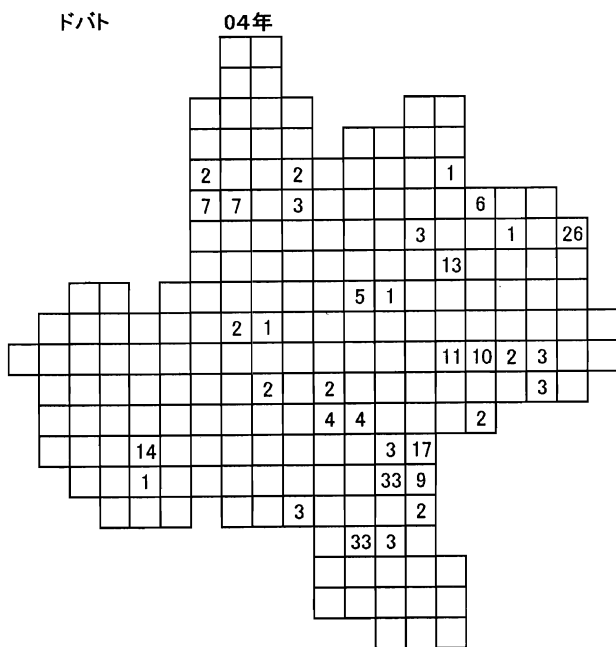
### 79. アヒル *Anas platyrhynchos* ver domestica

84年、94年、04年ともマガモとして整理してきたが、今回はアヒルとして整理した。84年・94年は記録されず、04年に2メッシュ2羽、今回14年に4メッシュ8羽が記録されている。

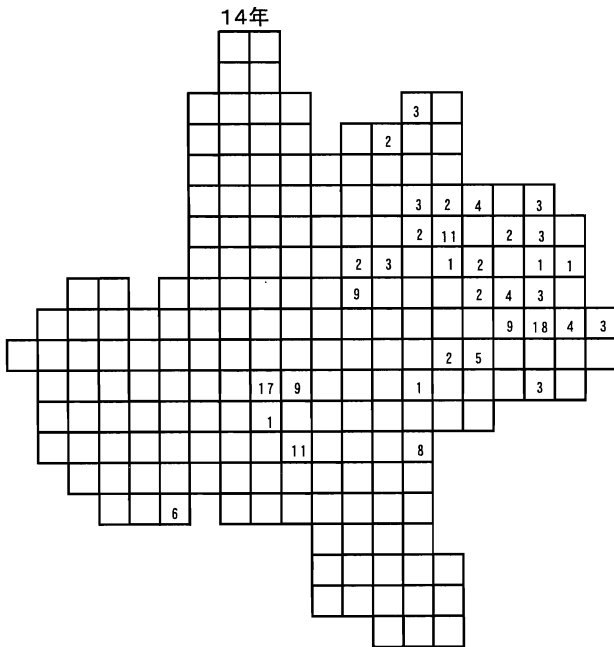
渡り鳥(市域では冬鳥)であるマガモが、当市域のような狭い範囲にこれほどの多数が繁殖地へ戻らずに残留することは考えられない。近年アヒル(マガモの飼育改良種・家禽)とカルガモの交配と思われる特徴をもつ個体が増加中であり、一年を通してマガモの色彩的特徴を持つものを見かけることが多くなっている。都市近郊の河川や公園などでこうした例を見かけることが多い。自然の生態系には好ましくないものであり、カルガモの純血を守っていくためにもアヒルの放し飼いは止めてほしいことである。

ドバト

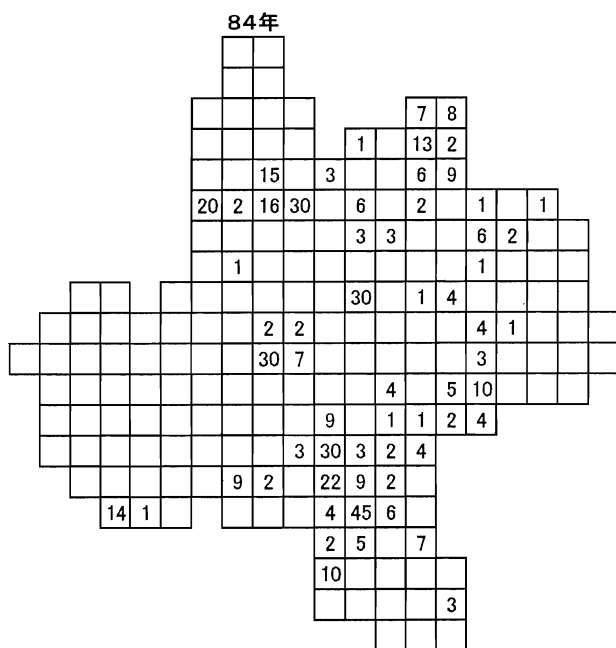
04年



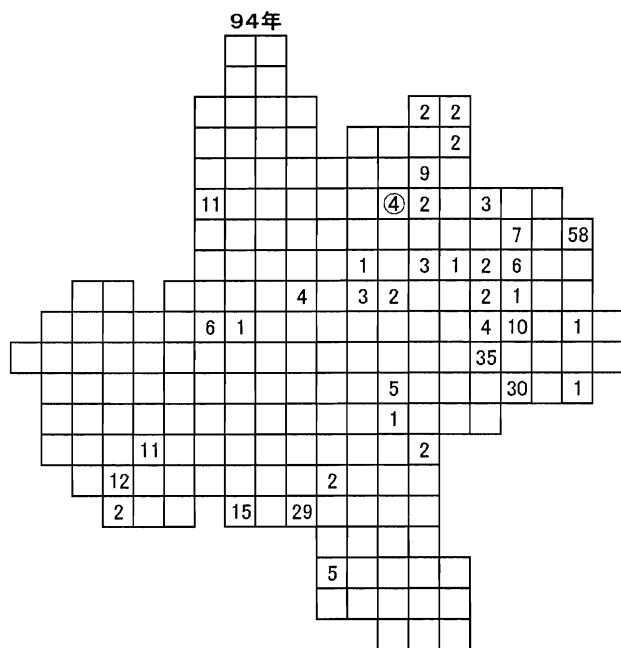
14年



84年



94年

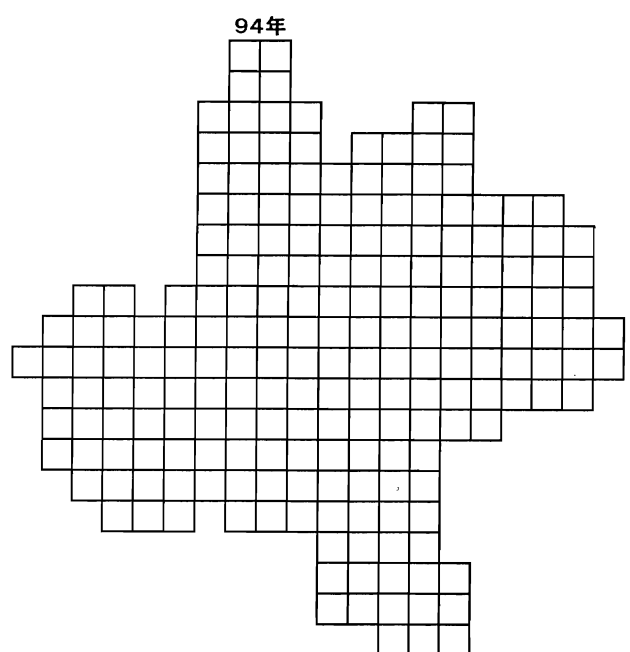
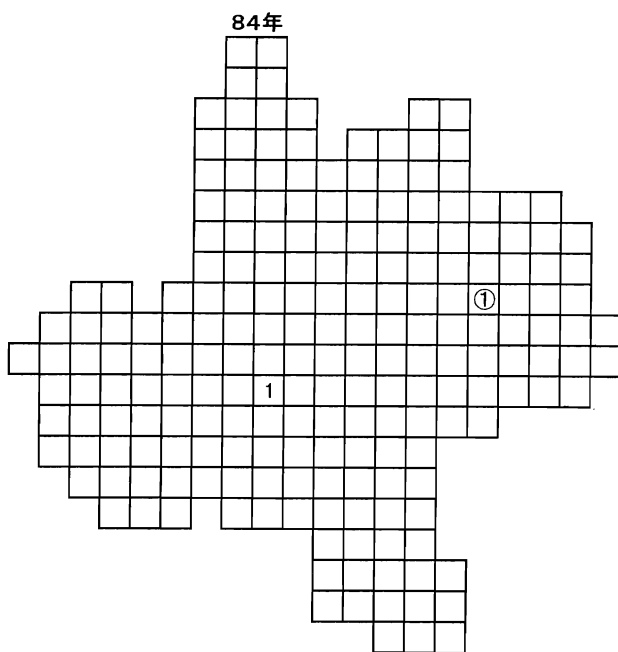
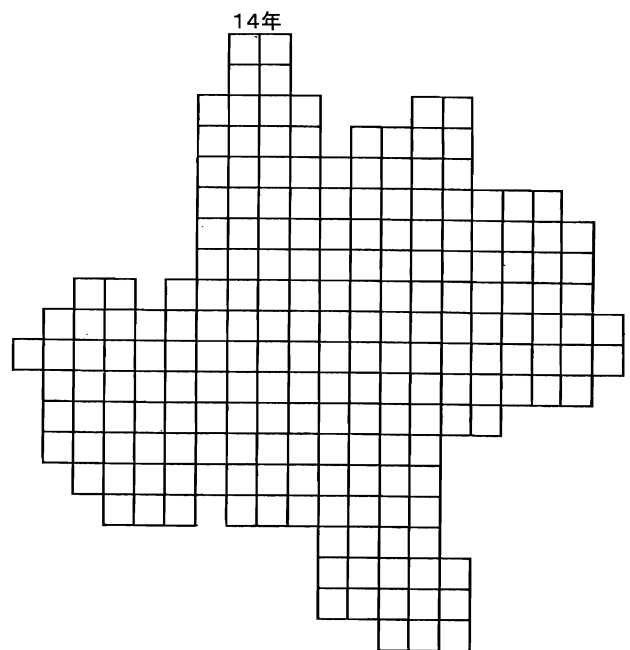
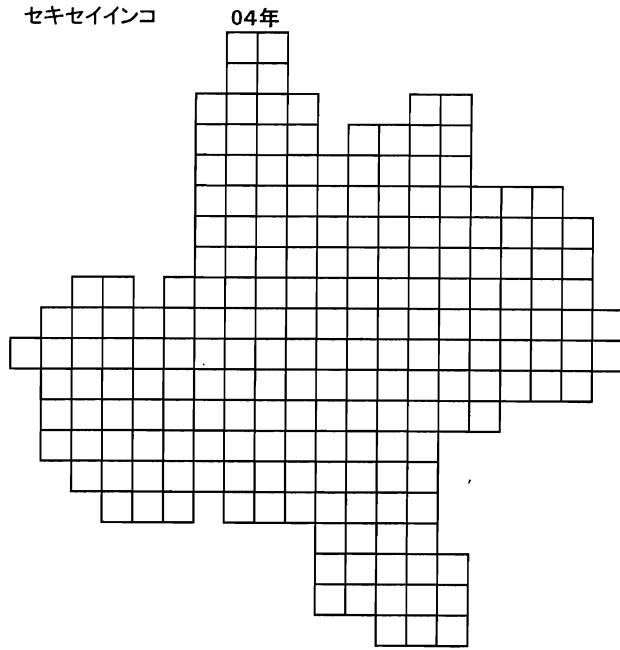


80. ドバト(カワラバト) *Columba livia* ver domestica

84年には64メッシュ487羽、94年には38メッシュ296羽、04年には35メッシュ 241羽、今回14年にも34メッシュ157羽を記録した。

メッシュ(区画)数、個体数とも年を追うごとに減少している。94年、04年、14年とメッシュ数はほぼ同じでありながら個体数は減少している。市街地、工場団地などもっぱら人工的な環境に棲息しているものが減少することは、喜ぶべきことと思われる。ユーラシア大陸原産のカワラバトの飼育・改良されたものである。伝書鳩としての改良もあって飛行力の優れたものもいる。コンクリート構造物が増えると、本種が増える傾向にある。

セキセイインコ

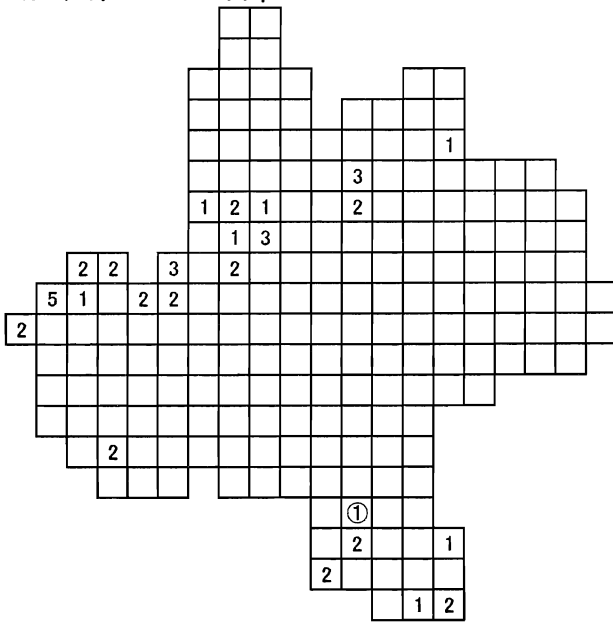


### 81. セキセイインコ *Melopsittacus uydulatus* ver domestica

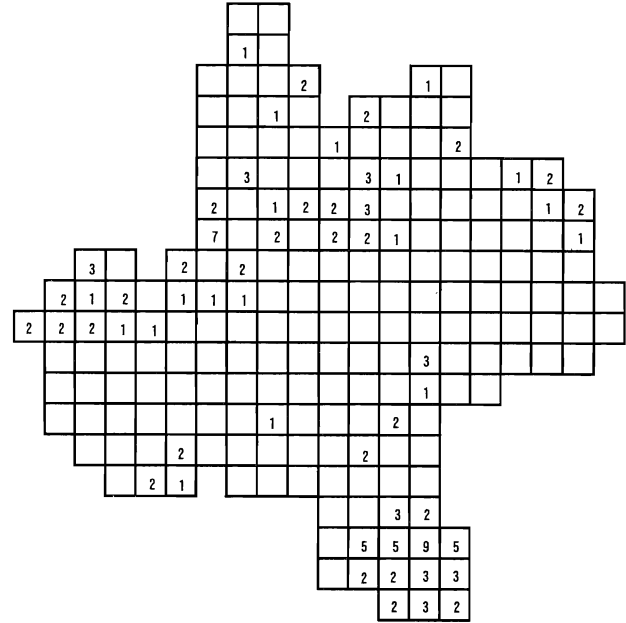
84年には2メッシュ2羽を記録し、94年、04年、14年には記録しなかった。オーストラリア原産の飼い鳥として輸入・改良されている。80年代は本種を飼育する者が多かったため、逃げ出す個体もいたと思われるが、その後は飼育する者が減ったこと、当地の冬の気候に対応できず、越冬できないと思われることなどで、その後の記録は途絶えている。

ガビチョウ

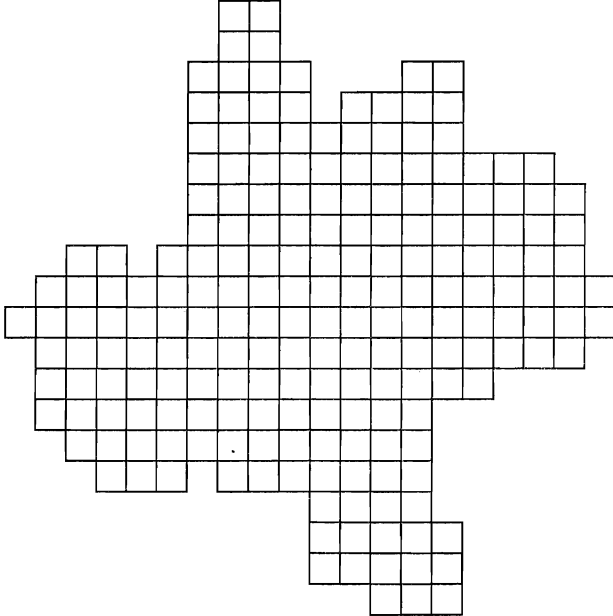
04年



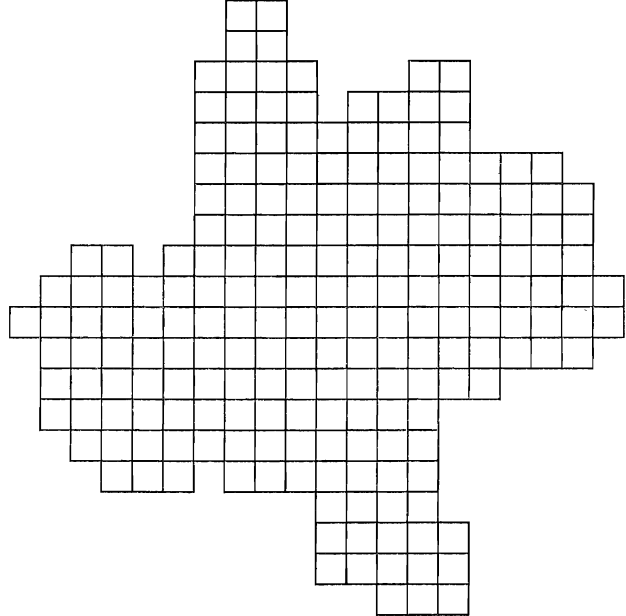
14年



84年



94年

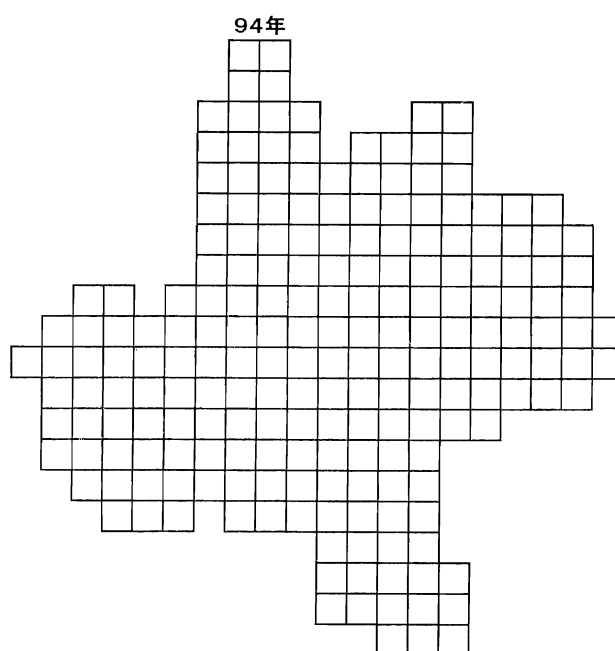
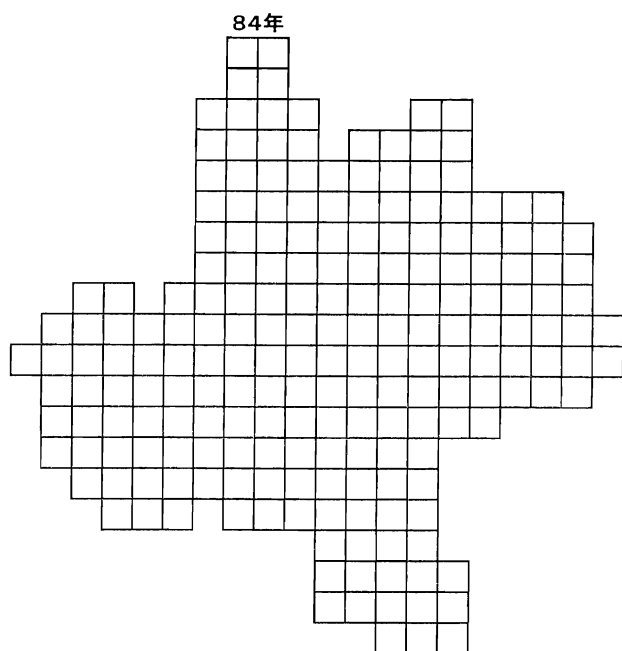
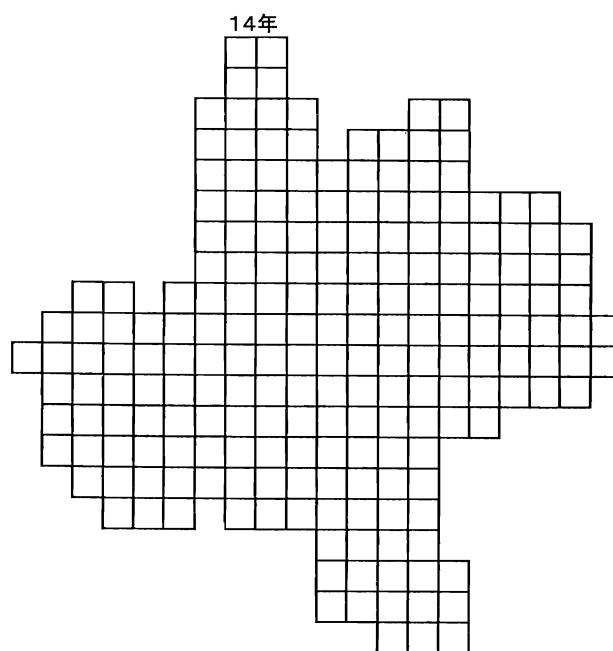
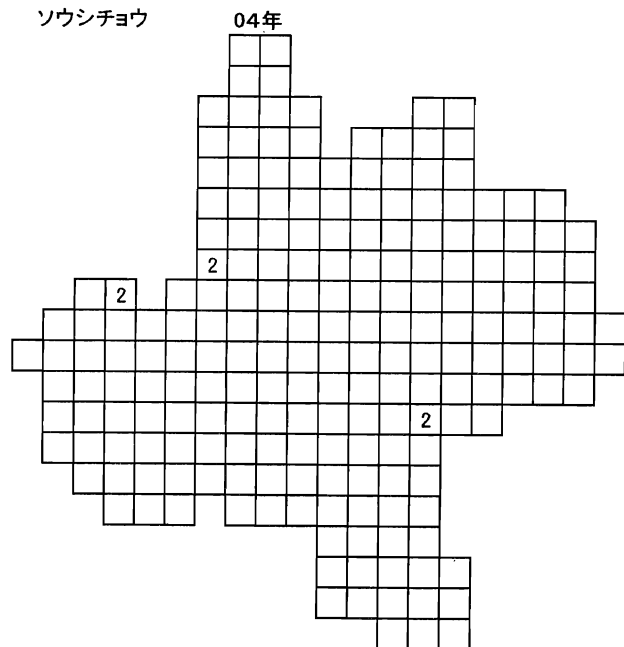


82. ガビチョウ *Garrulax canorus*

84年、94年には記録せず、04年には24メッシュ46羽、今回14年にも60メッシュ131羽を記録した。04年に初記録しており、14年には04年の2倍もの個体数を記録した。

本種は90年代後半から市域で認められるようになり、急激に増加している。全国的にも急増しており、この記録もそれを裏付ける結果になっている。中国原産の鳥で鳴き声が良いとして、中国では飼育愛好家が多い。体が大きいこと、声の大きいことなど日本人の嗜好に合わず、輸入したものの売れず、処置に困って野外へ放してしまったものが増加した？と考えられている。

ソウシチョウ



### 83. ソウシチョウ *Leiothrix lutea*

84年、94年には記録せず、04年には3メッシュ6羽を記録し、今回14年にも記録しなかった。04年に記録されたのみである。本種は中国原産の鳥で、早くから飼い鳥として輸入されてきた。その一部が逃げ出してのものであろう。その結果九州の山地では1970年代から繁殖していることが知られている。市域ではまだ少数が記録されているのみである。市域では主に冬期に見られていることが多く、越冬地的な使われ方をしているものと思われる。林の下層植生による藪に、小群で棲息している。

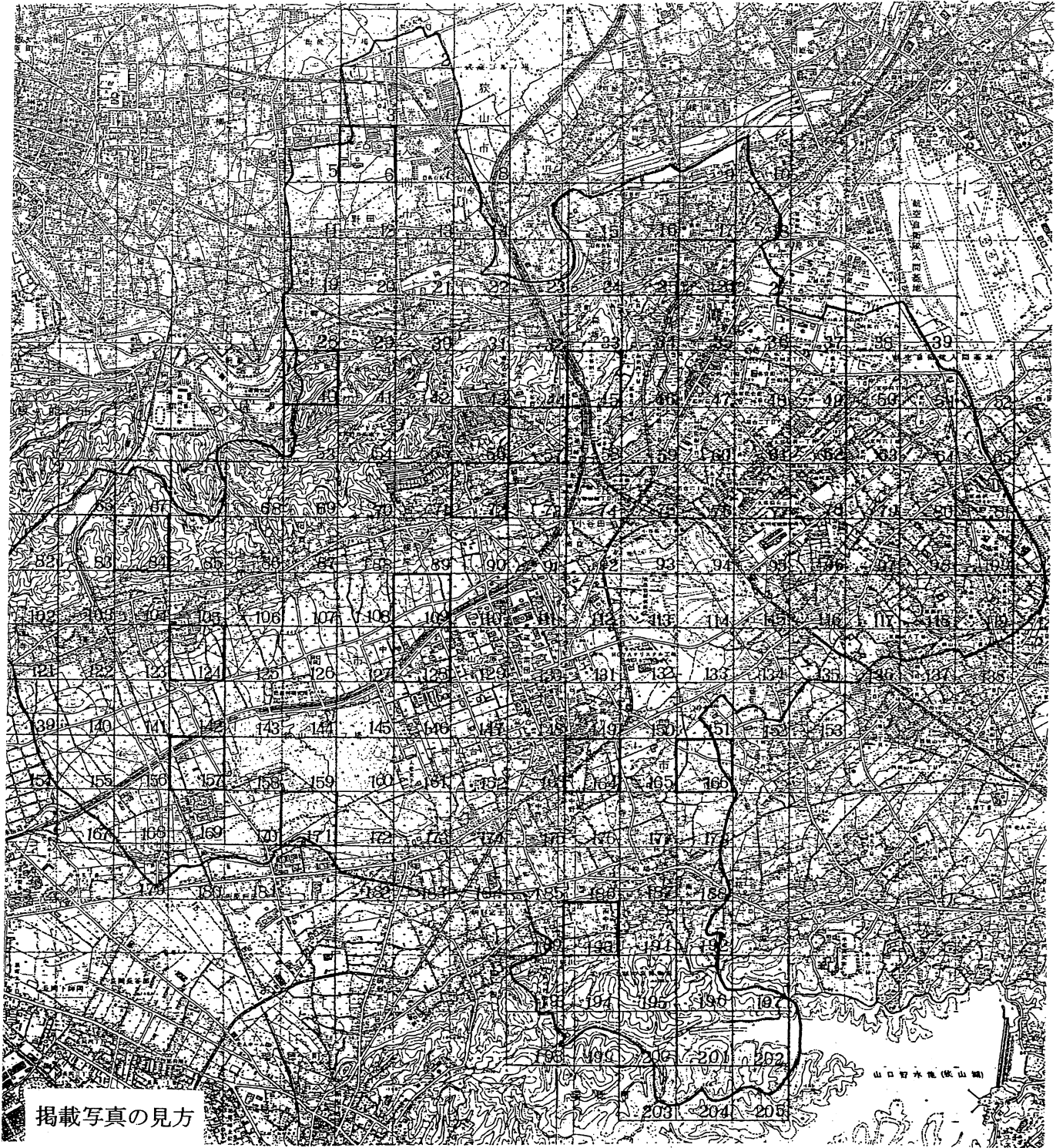


## 調査地の環境写真

「入間市鳥類分布調査」の第1の目的は、鳥類の現状の把握であるが、市内全体を歩いて調査することから、各調査区の中心点で東・南・西・北の方向において環境写真を撮影して行くことを目的の2とした。この結果84年・94年・04年・14年と同地点の環境写真が手に入ったことになる。この10年ごとの環境の変化を多くの方々に知っていただく絶好の資料が得られたと自負している。

以下に環境写真の一部であるが紹介する。

# 環境写真位置図



掲載写真の見方

メッシュNo.6

東

南

西

北

84年			
94年			
04年			
14年			